

Title	オスマン=アラブ主義者のディレンマ : <<盟約協会>>一九一三-一九一八年
Sub Title	The Ottoman-Arabist's dilemma and the covenant society, 1913-1918
Author	田口, 晶(Taguchi, Akira)
Publisher	三田史学会
Publication year	2001
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.71, No.1 (2001. 12) ,p.47- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20011200-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オスマン＝アラブ主義者のディレンマ ——《盟約協会》一九一三—一九一八年——

田口晶

一 序説

初期アラブ・ナシヨナリズム、とりわけ「青年トルコ」時代（一九〇八—一八年）に焦点を合わせた研究の課題はオスマン主義とアラブ・ナシヨナリズムの関係を描くことだ、といってよいだろう。というのも、オスマン主義が民族・宗教を超えたある一定の「普遍」を目指すのに対し、逆に「特殊」を強調するのがオスマン帝国におけるアラブ・ナシヨナリズムなのだから。だが、現実のオスマン主義が帝国の一体性維持の名のもとにトルコ・ナショナリズム（さらに一步進んでトゥラン主義）という「特殊」の側面を内に孕んでいたのもまた紛れもない事実である。それが帝国の「トルコ化」として表れる以上、アラブ・ナシヨナリズムはこの拡大解釈された

「特殊」オスマン主義と対峙せざるを得ない。⁽¹⁾二種類のオスマン主義をまず厳密に区別したうえで、だとすれば帝国の「枠組」そのものはアラブ・ナシヨナリズムにとつて全く相容れない存在であつたのか。これに対する懷疑が一九六〇年代以降登場した修正論的研究の主眼であつたように思われる。⁽²⁾それはアントニウスの『アラブの目覚め』に代表されるようなオスマン帝国の解体を必然視する通説的理解への挑戦であつた。⁽³⁾

オスマン帝国という国家の枠組に制約された——それはともすれば政治的に未成熟であるとの評価をともなう——青年トルコ時代のアラブ・ナシヨナリズムが、修正論的観点からアラブ主義（Arabism）⁽⁴⁾という特別な名で呼ばれるようになつてすでに久しい。言わば切り下げられたこの呼称には、裏返しの民族主義史觀や一種の進化

主義的な段階化認識が窺える⁽⁵⁾。しかし、ほぼ修正論者の共通理解となつた感のあるこの一項的な理念型も、アラブによる政治的運動の多様性を説明しきれるものではない。とりわけ研究対象を個人レヴェルにまで掘り下げてみた場合、意外と適用困難な場合が多いのである。オスマン帝国のアラブの多くが帝国の存在をとりあえず自明のものとしたうえで統治者側＝公権力への抵抗を実践したものであれば、まずは従来の固定化された観念の圈外に出て新たな分析基準を提起しなくてはなるまい。前世紀初頭のアラブ知識人がどのように現実世界を把握し、そこからいかなる政治的実践が生まれたかが問われるべきではなかろうか。

本稿は、上記の観点から敢えて「オスマン＝アラブ主義」という新たな分析視角のもとにアラブ政治運動を描き出すことを課題とする⁽⁶⁾。オスマン政府への「構え」を基準としたうえで、「体制派」オスマン主義や独立志向の「真性」アラブ・ナショナリズムとは区別された第三のカテゴリーとしてオスマン＝アラブ主義を位置づけたい。ここで暫定的に定義しておけば、オスマン＝アラブ主義とは、自らをアラブ人であると政治的に意識しつつ、それと同時にオスマン国民であるとも見なしているとい

う意味で「普遍」と「特殊」を内に孕んだ複合的アイデイティティを標榜するものと考えることができる。こうしたアプローチは、アラブ「国民」形成の過程を辿るというよりも、むしろアラブがオスマン主義をいかに読み換えてきたかにわれわれを注目させることになるだろう。これによつて運動の実相をとらえ、より緻密な検討を行なうための足がかりとしたい。本稿ではそのケース・スタディとして、一九一三年イスタンブルでオスマン軍人を中心に生まれた《盟約協会》Jam'iya al-'Ahd [以下、《協会》と適宜略]を取り上げるが、その際、結社創設者であるアジーズ・アリー・アル＝ミスリー 'Aziz 'Alī al-Misri (一八七九—一九六五年) の思想と行動を中心としつゝ、他のメンバーとの比較にも目を配る⁽⁷⁾。軍人の思想は忠誠の問題と切り離せないがゆえに、彼らを俎上に載せることは、本稿が対象とする第一次世界大戦直前からオスマン帝国解体へと至る政治的変動期において特に意味をもつ⁽⁸⁾。これは、《協会》と他のアラブ知識人のスタンス——オスマン＝アラブ主義の意味づけ、政治的行動形態、特に統治者側との関係——の差異、つまりオスマン＝アラブ主義に内在する異なる位相をも暗示している。

研究史では、先駆的なアントニウスからエリーゼル・タウバーの三部作に至るまで、『協会』を民族主義結社として評価することでは——肯定的にしろ修正論にしろ——一貫してきた。⁽⁹⁾ いざれにせよ結社の実像を伝えていふことは言いがたく、ここでもオスマン＝アラブ主義の視角に立つた再検討が求められているといえるだろう。

二 オスマントルコ化政策とアラブ会議

『盟約協会』が結成された経緯とはいがなるものであつたのか。まず、その前提を探つておこう。

オスマン帝国とアラブの関係は一九〇八年の「青年トルコ」革命によって転機を迎える。アブデュルハミト一世による專制を批判し、立憲政の回復を求めるという点において、「青年トルコ」運動は帝国の諸民族を包含する性格を有していた。⁽¹⁰⁾ つまり、運動の理念そのものはオスマン国民としての普遍性に立脚した「普遍」オスマン主義に基づくものだつたといつてよい。だが、前世紀以降の言語・文化的「復興」(nahda) によってゲルナーニの言う耐エントロピー性を獲得したアラブにとって、民族的アイデンティティを無視したいかなる変革も許容で

きるものではなかつた。すなわちオスマン＝アラブ主義の誕生である。やがて革命は成功したが、第二次立憲政の中心勢力となつていく『統一』と進歩委員会』⁽¹¹⁾ 『統一派』と略による「トルコ化」政策は彼らを失望させた。オスマン帝国を護持することにかけてはアブデュルハミトと『統一派』は軌を一にしており、しかも皮肉なことに、後者の扱い手こそは前者による「近代化」政策の所産といえる。「近代化」は中央集権と結びつく傾向をもつが、それは帝国の場合「トルコ化」と裏腹な関係にあつた。オスマン＝アラブ主義の運動は、こうした「特殊」オスマン主義に対抗するために、本来的「普遍」オスマン主義を分権論として読み換えていくことだつたといえる。それが民族自決運動の立場から見て微温的なものにとどまつた理由には、「青年トルコ」運動における改良主義志向の経験を見逃せない。以下に問題を整理してみる。

①運動の「アイデンティティ・ポリティクス」的要素。タンジマート以来のオスマン帝国の「近代化」政策は国家の管理職養成のための官立専門教育機関の発達をもたらし、アラブの言わば「教養市民層」を生みだした。帝国の「トルコ化」によって、彼らはアラブとしての集合

的アイデンティティの強調に引き寄せられる。しかし、それはオスマン国家というアリーナ内部での権利獲得闘争に帰結する可能性を同時に孕んでいた。

②帝国主義体制における立場。オスマン帝国の「近代化」政策は、一方でヨーロッパ列強の干渉に対する抵抗の側面をも有する。ロシアや西欧諸国の圧迫に屈しつつあるムスリムにとって、帝国が「希望の星」に見えたのとしても何ら不思議ではない。アラブにとってオスマン帝国の存在は列強の侵略への牽制としての意味を持つ。

③アラブの「地域主義」の問題。オスマン帝国内のアラブ地域は大きく「歴史的」シリア、イラク、アラビア半島、リビア（一九一二年まで）に分けることができるが、各地の社会構造はそれぞれ異なるために住民のオスマント政府に対するスタンスも当然違つてくる。さらに、帝国外に広がるアラブ地域、特に帝国が名目的な宗主権を有しながら実際にはイギリス支配下にあるエジプトの存在は、少なからぬ影響を運動にもたらすだろう。

この相互に関連しあう三つの問題は一九一三年六月にパリで開催された第一回アラブ会議にどう表れたであろうか。検討に入る前に会議の概略を示してみる。

まず出席者について言えば、多くがシリア出身者に

よつて占められたことがわかる。しかし、彼らは《ベイルート改革協会》⁽¹²⁾ Jam'īya Bayrūt al-İslāhiyyaからの代表を別にすれば、カイロの《オスマン地方分権党》⁽¹³⁾ Hizb al-Lāmarkaziyya al-İdāriyya al-'Uthmāniyya⁽¹⁴⁾ パリの《青年アラブ協会》⁽¹⁵⁾ al-Jam'iyya al-'Arabiyya al-Fatāt のメンバーに見られるように、オスマン帝国外在住者であった。《オスマン地方分権党》のザフラーウイー 'Abd al-Hamid al-Zahrāwī (一八七一—一九一六年) ⁽¹⁶⁾ が主宰した会議の焦点は、オスマン帝国におけるアラブ人の権利、分権論にもとづく改革の必要性の主張とシリアからの移民問題に絞られ、帝国からの分離や離脱は議題とならなかつた。彼らの決議はとりあえず受け入れられて、《統一派》の代表との間に一二項目にわたる合意がなされた。その要点は次のようなものである。州政府とあらゆるレヴエルの学校における公用語・教授語としてのアラビア語の採用。州行政での外国人専門家の招聘。召集兵の州外軍務の禁止。州総督、県知事 (mutasarrıfıma)⁽¹⁷⁾、上院議員の任命に関する差別撤廃措置など。

合意項目が端的に示すように、アラブ会議はオスマン^{II}アラブ主義のひとつの形を示してみせた。確かに、オスマン政府が多民族を包摂する帝国の「枠組」とトルコ

主義という「一兎を追う」と——それは統治者側の願望の多さを意味するが——による一義的なオスマン主義からの逸脱は、被統治者側による能動的なオスマン主義の解釈を可能とさせる。だが、果たして会議の構えは有効な戦術たりえたのか。というより、政権側に危機感を抱かせるほどのものであつたのか。まず①の問題が検討の対象となる。

もちろん会議ではアラブの集合的アイデンティティが排他的に主張されてはいない。決議文からは、帝国におけるナショナル・マイノリティとして同じ境遇にあるアルメニア人との連帯の表明すら見出せる。けれども、會議のスタンスがアラブという「特殊」を掲げることで、実は《統一派》率いるオスマン政府のイデオロギー——トルコという「特殊」——のちょうど鏡像関係を成していた側面は否定できない。現実のオスマン国家が純粹な見かけの社会——誰も「普遍」オスマン主義を信じないことによって機能する——であつたとすれば、ザフラー・ウイーらの要求は統治者側にとつてむしろ与し易いものだつた。こうした会議の「アイデンティティ・ポリティクス」は、シャキーブ・アルスラーン Shakib Arslan——帝国崩壊後におけるアラブ・ナショナリズムの代表的な

イデオローグのひとり——をはじめ、言わば「勝ち組」に属する「体制派」オスマン主義者の不信を買うことに(18)なる。結局、会議の成果は根本的な改革ではない、ザフラーウィーの上院議員任命に象徴される単なる懐柔策に還元されてしまうだろう。

むろん、革命ではなく改良を目指すのがオスマンニアラブ主義であるのなら、ザフラーウィーらの統治者側への関与は、原理的見地からの批判はさておき、リアル・ポリティクスとして唯一残された道であつたことは理解できる。「われわれはまずオスマン的結合を、さらにアラブ的結合を、そしてより重要なシリア的結合を有している」⁽¹⁹⁾。彼の言葉は会議の精神を端的に要約している。

だが、こうした個別的アイデンティティ（シリア→アラブ）とオスマン国家の一員という普遍的アイデンティティの間に生まれる緊張関係の克服という問題に関しても、ムスリムとキリスト教徒の意識の共有は果たして容易だつたのか。相次ぐ対外戦争での敗北によつてオスマン帝国は実質的にムスリムの国家となりつつあつたし、政府もまた「イスラーム」による一体性を強調し始めた。アラブ地域にしても、会議が一九世紀中葉以降の宗教・宗派紛争を反映した既存の地方制度を是認するので

あれば、これは避けて通れない問題である。②の問題が示すように、オスマン帝国の存在理由がヨーロッパ帝国主義からの防壁としての機能にあるにせよ、そもそもカリフを自称するスルタンの意味づけは、シリアのキリスト教徒にとってムスリムのそれと異なるのではないか。

確かに、会議では一八六〇年の宗派紛争をも引合いに出しつつ両者の協力が強調された。⁽²⁰⁾しかし、両者のスタンスの相違は、会議直前にベイルート代表のキリスト教徒らによるフランス当局との接触——これにはシリア主義に対するレバノン主義という地域主義の問題も絡んでいた——が発覚したことで現実のものとなる。会議の議論は両者の綱引きで相殺されてしまい、むしろ穩当なものとなつていく。《統一派》もこれを離間策として活用するのに吝かではなかつたようと思われる。会議後にイスタンブルを訪れたサラーム Salim 'Ali Salām らムスリム側代表は、オスマン国家とスルタン＝カリフへの忠誠を誓う。⁽²¹⁾ザフラー＝ウイーは、シリア人の分裂を嘆かざるを得なかつた。⁽²²⁾

問題はシリア人内部の確執にどまらない。会議がまとまりを欠きながらもシリア出身者主導で進められる一方で、他地域との関係をどう取り結ぶのか。イラク代表

の抵抗で「シリア会議」の名称は避けられたものの、「シリアとアラブ」と両者が併記された文言が決議文に繰り返し現れる、とから見てもシリアの特権的な位置付けは濃厚であった。では、会議は「アラブ」をどのように定義したのか。それが③の問題である。ウライシー 'Abd al-Ghani al-'Urayysi⁽²³⁾は、アラブが集団 (jamā'a) 的権利を主張しうるかと問い合わせ、アラブはそれに必要不可欠な言語・人種・共通の歴史と慣習・政治的情念を有すると結論づけた。⁽²⁴⁾こうしてアラブの民族的アイデンティティ (jinsiya) が確認された以上、次にアラブの空間概念、つまりその境界作定に注意を向ける必要がある。

しかし、会議にとつて「アラブ」とは、あくまでオスマン帝国内のアラブでしかない。討議への参加を要求したあるエジプト人法学者に対してザフラー＝ウイーは、独自の行政組織をもつエジプトは議論の対象とはなりえない、としてこれを退ける。会議のアラブ的「想像」はオスマン帝国の版図を越えることはなかつた。それは帝国内のトルコ人と見事なまでに相似形をなしていたのである。

三 『盟約協会』の結成

綱領と国家構想

では、『盟約協会』は「失敗した」アラブ会議に対し如何なるオスマン＝アラブ主義を構想したのか。まず、両者の関わりに触れておかなければならぬ。一九一三年一〇月二八日の『協会』結成⁽²⁷⁾は、会議に対する否定的態度に起因していた。

例えば、やがて『協会』創設者となるミスリーは当リビアでイタリア軍と戦っていたが、この言わば帝国主義者の首府——パリ——での会議開催自体をまるで利敵行為とばかりに非難している。会議のタイミングがちょうど一度にわたるバルカン戦争の谷間の時期であつただけに尚更であろう。シリアを中心に各地から会議に対する支持が表明されるなか、ミスリーはそれを拒否した。しかも帰国してみると、オスマン政府と会議との合意は事実上骨抜きにされている。彼は、ザフラー・ウィーらによる『統一派』との妥協に激怒し、これに「反対するよう若者たちを集めて煽動しようと」画策すらしたのだつた。

こうした態度に軍人独特の心性を見て取ることは容易

オスマン＝アラブ主義者のディレンマ

であり、ミスリーが結成した『協会』がセクト的純化主義を採ることによって、メンバーの多くを軍人が占めたのも当然の成り行きであつたかもしれない。⁽³⁰⁾アラブ会議で明らかとなつた、シリア人によるオスマン帝国を外国に売り渡しかねない危険な「遊戯」を阻止すること。そのためにはわれわれ軍人が国家の支柱とならねばならぬ。⁽³¹⁾彼は結社の名称の由来について「祖国 *watan*への奉仕を、メンバーと、そしてアッラーとの盟約のために」と解説する。ここで特徴的なのは、彼らのいう「祖国」が他ならぬオスマン帝国を指していたことだつた。結社の旗印となる「盟約」というシニフィアンは、会議に参加した諸結社のそれ——「ベイルート」「地方分権（特にシリア）」「青年アラブ」に暗示されるアイデンティティの強調——と明らかなコントラストをなしている。民族の堵塞性としての軍隊は「大きな、集権的に教育され、文化的に同質な単位」（E・ゲルナー）といえるだろう。それは抑圧装置であるとともに最も機能的な国民統合の装置として、あるいは現存の国家を過去につなぐ最後の絆として結束が重視された、言わばオスマン帝国を小さくしたような社会的場だった。事実、『協会』メンバーはアラブ人だけでなく、トルコ人・アルバニア人・クル

ド人をも含めた「さまざま民族的出自」から構成されていたのである。⁽³³⁾ 結社の綱領でも「六世紀にわたつて西洋に対する前衛の役目を果たした」トルコ人を評価し、アラブはその「後衛」たらんことが謳われていた。⁽³⁴⁾

しかし、それは《協会》が公の思想を袒述するだけの結社であつたことを意味しない。確かに彼らの「国民」概念からは、軍が政治化する際に典型的に見られる自己と（あくまで彼らが考える）国益の一体化による過剰なまでの国家の後見人、救済者気取りを窺うことができるが、それだけに過去の記憶と現在の主体的な意志に根ざした、つまりルナンが定義した意味での「開かれた」ナショナリズムを構想する余地も生じてくる。それを詳らかにするためには綱領の分析が必須であろう。だが、この綱領そのものに潜む問題性には慎重であらねばならない。というのも、《協会》が秘密結社だったためにわれわれは関係者の証言に頼らざるを得ないのだが、諸テクストによつて表現の異同が見られるうえ、オスマン帝国の解体による事後的な再構成の可能性を否定できないからである。⁽³⁵⁾ 現在われわれが知りうる綱領は果たして結社創設時の状況を反映しているのか。《協会》はトルコ＝アラブ二重帝国を構想したことで知られるが、もし《協

会》がアラブ人だけでなくその他のマイノリティをメンバーに含んでいたのであれば、「アラブ地域の自治 (al-istiqlāl al-dākhili)」（綱領第一項）に限定された要求は結社の実情に合致しているとはいえない。だとすれば、《協会》の「綱領」以前の綱領、つまり「眞の」綱領を復元する必要がある。

これに関しては、われわれは残念ながら未だ決定的な資料を見出すことはできない。ただ、これまでミスリーの個人的な構想とされてきた「東地中海國家」(Dawla Sharq al-Bahr al-Mutawassi) 構想というものが、彼の構想は結局他のメンバーに受け容れられなかつたという後年の回想が事実としても、《協会》の出发点からすればむしろ「眞の」綱領にふれわしい。少なくとも、結社設立からある時点までは採用されたと見るべきではなかろうか。ともかくその主要な点を抜き出してみよう。

- ①トルコ、アラブ、アルバニア、ブルガリアのみならず、エジプト、スーダン、リビア、チュニジアにまたがる連邦国家。

②象徴 (*ra'is ramzi*) としてのオスマン家のスルタン。

③教育・国防・外交を除く行政は構成国が管轄する。

④共通語としてのオスマン語とそれぞれの地域語の共存。

⑤宗教的寛容 (wujūb al-tasāmuḥ al-dīn)⁽³³⁾。

いににあるのはアラブ会議、れんには《協会》の「綱領」とはかなり異なる構想である。「東地中海国家」は会議がそうであつたように既存の州の枠組に必ずしも甘んじてはいられない。むしろ現存するオスマン帝国の領域すら超えた構想を示すことで現状の破壊を意図している。

帝国の統治機構に関していえば、「各地域が独自の議会を、イスタンブルに連邦議会 barlamān ittihād を持つ合州国 wilāyat muttahidā」として、「綱領」でモデルされたオーストリア＝ハンガリーよりもアメリカ合州国が強く意識されているが、スルタンが名目的な存在であることを考えれば、強力な中央権力の存在しない緩やかな国家連合に近い。一方で、多元主義のもとでアメリカ人の同質性が強調されるように、ミスリーの構想も様々なアイデンティティを尊重しつつ「東地中海」人としての同質性を標榜している。共通の教育政策が求められるのはこのためかもしれない。

ミスリーの「東地中海国家」構想と《協会》の「綱領」との比較では、スルタン＝カリフの問題が注目に値

しよう。前者は寛容な宗教政策が強調され、カリフではなく「世俗的」権威としてのスルタンにのみ言及する。

他方、「綱領」は第二項でカリフについて触れているが、「国民 (al-ummā) の政府と議会を有する英國の君主制に倣う⁽⁴¹⁾」という付帯条項がついていた。これは無論英國教会の首長としての役割を併せ持つイングランド国王の存在が念頭にあるが、むしろ立憲君主制との関連で主張されたものだろう。ニュアンスに若干の相違はあるにせよ、とともにスルタン＝カリフの相対化を意図している。この問題に対しても踏み込んだ議論を避けたうえに、サラームらのイスタンブル訪問に象徴されることくスルタン＝カリフの幻影から逃れられなかつたアラブ会議との差異は歴然である。

アラブ会議がアラブ——というよりシリア——の集団的権利を強調する「アイデンティティ・ポリティクス」だとすれば、「東地中海国家」構想はその多元的志向とスルタン＝カリフ問題への対応に現れているように、オスマン＝カリフ問題のもう一方の極として支配的イデオロギーをよりラディカルに読み換える「眞の」オスマン主義とでも呼ぶべきある種のユートピア思想を提示して見せた。ただ、ミスリーの構想が受け容れられず、内容

的に両者の中間に位置する「綱領」に結局落ち着いたのだとすれば、それは、アラブが「多数派」に過ぎない結社からアラブそのものの結社へ、という『協会』の重大な変質を意味するだろう。

イデオロギーと実践

そこで次に『盟約協会』の主要メンバーに焦点を合わせつつ、結社内におけるスタンスの振幅をも見ていくことにしたい。

結社創設者であるミスリーの前半生は、上記の構想を描くにふさわしい脱領域的なものであった。⁽⁴³⁾『協会』のみならず、当時のアラブ政治運動全体を通じても稀有なエジプト出身者の彼にとって、イギリスによるエジプトの軍事占領は決定的な原体験となる。それは彼に「エジプトからイギリスを追い出す」ためオスマン軍人となることを決心させた。将来を「希望の星」オスマン帝国に託したミスリーは、しかし、帝国の現実を知るに至つて「青年トルコ」運動に加わることになる。⁽⁴⁴⁾『統一派』のメンバーであった彼は、革命後の失望から今度はそれの批判者へと転じ、『文芸クラブ』、『カフターン協会』等の諸結社で活動していく。

一九一〇年、イエメンのイマーム・ヤフヤーが反乱を

起こすと、鎮圧部隊の参謀長として従軍したミスリーは和平交渉で中心的な役割を果たした。⁽⁴⁵⁾イエメンへの自治権付与という合意内容は今後のモデルとして評価され、アラブ知識人の間で彼の声望は高まる。

だが、彼がオスマン＝アラブ主義者として自己を確立する一方で、故郷であるエジプトとの距離は開いていった。ファリード Muhammad Farid らエジプト民族運動の指導者たちは、ミスリーの行動を帝国の分裂をむしろ加速させるものとして不信の目で見ている。ミスリーは帝国の内実を理解しないそうした単純な見解には与しなかつた。彼はエジプトを離れたことによる自身の変化に気付かざるを得ない。

トリポリ戦争はミスリーにとって試練となつた。オスマン政府がリビアを見放すという状況下で、彼は一年半にわたりイタリア軍を苦しめる。だが、「キレナイカの英雄」は周囲の反対を押し切つて帰国してしまつた。⁽⁴⁶⁾前述のとおり、その後の『協会』結成に至る経過からすれば、本国の危機が彼にそうさせたと言うべきだろう。しかし、一見アラブへの「背信」ともとれるこの行為に、ミスリー個人が抱えるオスマン＝アラブ主義の矛盾がある。彼の行動を律していたのは、何よりもまずオスマン

軍人としてのそれであつた。これは、父がカフカスからの亡命者でチエルケス人だつたというミスリーの出自とも絡んでくる。ある意味で彼もまたオスマン帝国への亡命者だつた。エジプトを離れることで初めて「アラブ人」となつたのである。⁽⁴⁸⁾ だが、デラシネの彼は、アラブの一体性についても醒めた認識を抱くことになるだろう。

進歩的なイラク人、教養はあるが現実性に欠けるシリア人[…]。トリポリタニア、イエメン、ヒジャーズと続き最下位はあろうことか故郷のエジプトである。彼はエジプト人の「抜け目なく堕落しきつた性格に怖氣を振るつていた」。⁽⁴⁹⁾

ミスリーにとって、アラブとは「フイクション」だつたのかもしれない。だからこそ多元的なオスマン帝国という「神話」を必要としていたのである。「フイクション」とは言つても、それは自らのアラブとしての虚構性をアイロニカルに自覺していた、という意味においてである。彼がアラブ会議による「アイデンティティ・ポリティクス」を軽蔑していたのはそのためであろう。だが、彼は自身の矛盾に関しては口を瞑つていたといえる。

ユートピアの夢想はどんなものであれ、まずはそれを夢想した人間が自分のために望んだものとなつてしまふの

は避けられない。口には出さないが、彼は他人も同じことを望んでいるのだと決めてかかつっていた。葬り去られた「東地中海国家」はひとりの亡命者が自分の居場所を求めて思い描いた構想なのである。

一方、《盟約協会》のオスマン帝国内出身者は如何なる態度を示したのだろうか。

彼らの意識が帝国の外からやつて来たミスリーのそれとやや異なるものであろうことは容易に想像できるが、纏めてみるとこうなる。

(i) 《協会》にはイラク、シリア出身者がおり、特に前者が多数派だつた。⁽⁵⁰⁾ ハーシミー・サイードを始めとするイラク出身者の軍人志望の動機として「立身出世」願望を指摘できる。⁽⁵¹⁾ 「イスタンブルは大志あるイラク人のメツカであつた」とあるイラク人がいみじくも述べたように、士官学校は中下層階級にもエリートへのバイパスとして開かれていた。《協会》のモットー「意思あるところに道あり (Laysa il-linsān illa mā sa'a)」⁽⁵²⁾ はまさに彼らの願望を示したものといえる。軍の「トルコ化」はそれを阻害しかねない。

(ii) 《協会》のメンバーの多くは軍人であり、オスマン国家護持の尖兵としての自負を持つ。とともに、アラ

ブとしてのアイデンティティをも併せ持つ彼らは、弱体化した帝国の瓦解に備えた「準備工作」にも手を染めていく。オスマン＝アラブ主義者の帝国に対する態度はアンビヴァレントなものとならざるを得ない。一九一二年バルカン戦争時のイラク出身軍人六〇名による「蜂起」未遂事件⁽⁵⁵⁾、アラビア半島の諸勢力との接触はこうした文脈で捉えられる。

(iii) 《協会》がイスタンブルで結成されたことに表れているように、彼らは社会的出自や「教育的巡礼」によって地域的利害からある程度切り離され、帝国の一体性を刷り込まれていた。ある《協会》幹部による「行政的巡礼」——イスタンブル→ベイルート→ダマスクス→モースル→バグダード→バスラ——がもたらした地方支部設置の経緯は、彼らの空間認識があくまでオスマン帝国を前提にしていたことを示すものだろう。⁽⁵⁶⁾

結局、オスマン帝国内——とりわけイラク——出身者は《協会》に何を託そうとしていたのか。サイードはのちに「アラブの反乱」を回想した際にこう述べている。「われわれの中に、オスマン帝国からの離脱を考える者はひとりもなかつた。われわれの考えは、共通の国家機構においてトルコ人と協力するという条件で、アラブ地

域の行政機関と公用語としてのアラビア語を獲得することにあつた」⁽⁵⁸⁾。これは現在われわれが知りうる結社の「綱領」の端的な要約といえる。それどころか、地域的利害への関心が希薄なことを除けばアラブ会議との思想的な差異は必ずしも明確ではなく、むしろアラブ・ナショナリズムへの直線上に位置づけられるような性格をもつてゐる。だが、彼らが会議の妥協的なスタンスに憤慨し、少なくともその初期の段階においてミスリーの「東地中海国家」構想に一定の理解を示したことは間違いないだろう。でなければ、多民族からなる《協会》そのものの成立がありえなかつたはずである。にもかかわらずここに露呈しているミスリーとサイードの事後の「語り」のずれは、それぞれが《協会》に抱いたイメージとやがて結社を分裂に導く「アラブの反乱」への対応の相違が反映されたものであるとは言えないだろうか。

四 《盟約協会》と青年トルコ人

アラブ会議をめぐつてミスリーと対立したザフラー・ウイーはこう述べている。彼ら軍人たちは政治的経験が欠如しており、政治に関わるべきではない。彼らのやり方ときたら全く稚拙で退屈してしまう、と。ハマ選出の

代議士であり、野党《自由と連合党》の創立メンバーだつたザフラー⁽⁶⁰⁾ウイーにすれば、《盟約協会》の目指す方向は現実性を欠く縊空事でしかなかつた。あるいは、青年将校たちが思い描く性急な「解放のドグマ」に対する警戒の念もあつたかもしれない。

だが、会議が統治者側にとつて脅威となりえずザフラー⁽⁶¹⁾ウイー自身の上院議員就任をはじめとする若干のポスト配分による取り込みのすえに無力化されたのは、現存の社会構造内部において「承認」をもとめる政治スタイルが、彼らに受動的な態度をもたらし、その自律性を奪つてしまつことにもよるのではないか。他方、《協会》の構えは——結社内部のずれがあつたにせよ——現存秩序の破壊を目指す「真の」オスマン主義を標榜するものだつた。かつて統治者側が提唱した「普遍」オスマン主義——宗教、民族的権利の平等——は、彼らの大義名分を推進するのに一役買つたが、被統治者側がこの普遍性を真摯に受け止め始めると、それは厄介なお荷物となる。⁽⁶²⁾こうして、《協会》の中でも最もラディカルな思想の持主であるミスリリーが「反逆罪」で裁かれる素地が生まれた。

一九〇九年の反革命の鎮圧、イマーム・ヤフヤーとの

オスマンニアラブ主義者のディレンマ

和平交渉、リビアにおけるイタリア軍との戦いによつて、ミスリリーはすでに（幾分虚像も孕みつつ）カリスマ的な声を得ていた——よつて、早くから当局の監視下に置かれてもいたが。彼はまた、自身の見解を歯に衣着せず主張したために敵が多かつた。ジエマル・パシャは、アラブ人に対するトルコ人の侮蔑的態度にミスリリーが怒りを爆発させたと述べている。その怒りの標的となつた人物にアフメット・アガエフ（アーオール）——ロシア支配下アゼルバイジヤンからの亡命トルコ人で、ある意味でミスリリーと同じ境遇だつた——がいた。ある日、自宅で例の構想をくどくどと話していたミスリリーを客のアガエフがさえぎつたのである。「卑しい」アラブ人やアルバニア人の存在を否定し、トルコ人によるアジア支配を宣言した彼をミスリリーはその場から叩き出したのだつた。⁽⁶³⁾また、アヤ・ソフィヤで行なわれていた反アラブ色濃厚な説教や、コーランのトルコ語翻訳の動きに政治的意図を読み取つてもいる。特に知られているのはエンヴェル・パシャとの確執だろう。「東地中海國家」構想の原型をすでに士官学校時代から抱いていたミスリリーは、エンヴェルとは学生時代から犬猿の仲だつた。対立はリビアで再び燃え上がる。⁽⁶⁴⁾

ジエマルが述べるように、両者の対立には同世代ながら今や陸軍大臣にまで登りつめたエンヴエルと一介の中佐に過ぎないミスリーの間の微妙な心理的葛藤を無視できない。⁽⁶⁸⁾ だが、ミスリーからすれば、昇進が必ずしも能効主義でなかつた点に歯噛みする思いだつたろう。要するに、彼は政治的にうまく立ち回る能力に全く欠けていたのである。

いずれにしろ、陸相としてエンヴエルは軍の改革に乗出し、大掛かりな「リストラ」⁽⁶⁹⁾ を敢行した。しかし、少なくともアラブ側にとつて、改革の実態は軍の「トルコ化」に他ならなかつた。アラブ人将軍たちの大量の引退と将校の配置替えが行なわれ、ミスリー自身もアンカラへの異動を命ぜられる。耐えがたく感じた彼はついに現役を去る決意をしたが、それは軍内に少なからぬ動揺を引き起こした。ミスリーの影響力を危惧したオスマン当局は、リビア戦争における公費流用を理由に彼の逮捕に踏み切る。だが、それは（たとえ事実だとしても）眞の訴追理由ではなかつた。その気があれば、当局は帰国直後に——つまり《協会》結成以前に——彼を逮捕できたはずである。軍内の秘密結社の発覚は、同時に統治者側の威信失墜を招きかねない。別件逮捕は、既存の支配

イデオロギーと秩序に対するミスリーらの批判を瑣末な法的問題が持つ字義どおりの意味に矮小化してしまったのである。しかし、事態は統治者側の意図とは裏腹に、状況の政治化をもたらすことになる。

軍法会議の審理が当初の罪状から政治的な異端裁判——イタリア軍との内通、アラブの独立計画——への変質という経過をたどることによつて、統治者側の意図は明らかとなつた。彼らはミスリーの構想の向こう側にあるはずの「秘密の謀略」を疑つていたのである。ミスリーは「トルコ人の敵であり、とりわけエンヴエルの敵である。彼はトルコ国家への反逆者である」という、ある検察側証人のあからさまな発言によつてそれは裏付けられた。オスマン主義がトルコ主義という「特殊」を糊塗するイデオロギーに過ぎないと自ら公言してしまつたのである。⁽⁷⁰⁾

ミスリーの逮捕はオスマン帝国内外のアラブの抗議行動を引き起こした。これにイギリスなどの介入も加わり、ミスリーに対する死刑判決は破棄され国外追放処分で問題は決着する。だが、あらゆる意味で政治的なこの裁判がもたらした影響は、単にこれ以降のアラブ・トルコ関

係の流動化にどゞまらない。知識人のみならず大衆までをも巻き込んだ広汎な抗議運動は、アラブ会議以来のアラブ内部の対立をとりあえず解消——ザフラー・ウイーは運動において主導的役割を果たした——させることになる。イギリスの介入は、アラブ・トルコ関係が国際政治の一環に組み込まれている現実——それは「アラブの反乱」でより明確となる——をまさまさと見せつけました。しかし最大の皮肉は、裁判にしろ、抗議行動にしろ、言わば「偶像化」されたミスリーをめぐつて事態が展開されたことではなかつたか。

ジエマルによるシリアでのアラブ政治運動弾圧（一九一六年）もオスマン＝アラブ主義者の「偶像化」に決定的な作用をもたらした。第一次世界大戦下のある種異常な雰囲気の中で行なわれたアレー⁽⁷⁴⁾軍事法廷における死刑判決は欠席分も含め八〇名にのぼる。そして実際に処刑された三二名の中にザフラー・ウイーも含まれていた。⁽⁷⁵⁾彼の《統一派》を中心とした政治力学への介入の試みは悲劇的な結末に終わったのである。無論、《盟約協会》⁽⁷⁶⁾からもジャザーリーを始め四名の犠牲者を出した。「アラブ独立思想を生んだ代表的な指導者のひとりであり、将校の結社を設立した」というのがジャザーリー

の判決理由であつたが、具体的には一九一三年初頭のベイルートを舞台とした「シリア国家」樹立計画に関与したことにあるとされる。⁽⁷⁸⁾この事件は（前節で言及した）アラブ人将校による「蜂起」計画の中でも最大のものであるし、オスマン＝アラブ主義の性格を考えるためにもここで取り上げておきたい。

一九一三年一月二七日、ジャザーリーら四人を乗せたフランス国籍の船が極秘裏にイスタンブルを出航しベイルートに向かつた。彼らは、ジャザーリーが主宰した事前の秘密会合で、現在劣勢にあるバルカン戦争でオスマン帝国が崩壊した場合、その受け皿としてシリアにアラブ国家を創ること、元首としてエジプト副王家からウマル・トゥースーンを擁立すべきことを取り決めていた。⁽⁷⁹⁾配布されるべきマニフェストも作成済みであったという。

ところで、ジャザーリーはシリアの著名な思想家ターヒル Tahir al-Jaza'iri の甥でもあり、《協会》中異色のこの人物は、叔父の文化サークルを通じて知識人との幅広い交友があつた。⁽⁸⁰⁾プロジェクトに参画したとされるザフラー・ウイー、リダー、アズム Rafiq al-'Azm ら《オスマン地方分権党》メンバーはいずれも当時エジプト在

住であり、彼らがいかなる役割を担っていたのか判然とはしないが⁽⁸⁵⁾、おそらく副王との交渉や言論面での活動が期待されていたのだろう。⁽⁸⁶⁾一方、ジャザーアイリーはサラームら『ベイルート改革協会』の協力を取り付けることに成功し、やがて決起の日取りも決まる。⁽⁸⁷⁾だが、プロジェクトは実行寸前で破棄された。フランスの在ベイルート総領事に「シリア問題はパリ、ロンドン、ベルリンで解決される」といふもなく撥ねつけられたからである⁽⁸⁸⁾。結局、帝国自体も崩壊を免れたのだった。

この事件は、第一次大戦以前のアラブ・ナショナリズムのポジティヴな側面を示すものとされてきた。⁽⁸⁹⁾ジャザーアイリーらはこのとき国旗（黒・白・赤の三色旗）や国歌まで用意し、そのことはナショナル・ルーツの物語として集団的に記憶され神話化されてもいる。しかし、これをもつてジャザーアイリーがオスマン帝国の解体を意図していたと即断するのは早計に過ぎるのではなかろうか。事件はアラブ会議や『協会』結成以前のことであり、彼自身プロジェクトの中止後直ちにバルカンの前線に戻っている。

実際、ジャザーアイリーは『協会』に加わったものの、アラブ会議には同情的だった。彼は、ザフラーイーら

が『統一派』と結んだ合意が満足行くものではなかつたことは認めつつこう述べる。「だが、何ができるというのだ？ザフラーイーが誤つていたとこの合意を批判することはわかれにできるだろうか？もしザフラーイーが政府と妥協しなかつたら、われわれはより窮地に陥つていただろうから」。⁽⁹⁰⁾ジャザーアイリーのこの態度は、彼がシリア人だつたことやザフラーイーと長年の知己だつたこと、さらに「青年トルコ」運動への関与がそうさせた改良主義的志向によるものでもあろう。だが、それだけでなくジャザーアイリーには政治的見解の多様性を認める寛容な精神があつた。彼は、ちょうどトルコ人がそうであつたように、多様な結社がそれぞれのやり方で目標を追求していくのがアラブの政治運動にとって望ましいと考えていたようである。⁽⁹¹⁾複数性や多様性の肯定は、叔父のサークルにおける知識人との「交通」を通じて育まれたものと言えようか。こうした意味ではセクト主義に傾きがちなミスリードやや肌合いを異にしていたかもしれない。しかし、第一次大戦という例外状況はジャザーアイリーのような立場をもはや許さなかつた。のみならず、「アイデンティティ・ポリティクス」や「眞の」オスマン主義をそれぞれ追求するオスマン＝アラブ

主義者たちに「オスマン」か「アラブ」かの「二者択一」を迫つてゐるのである。

五 オスマント国家とアラブ民族と

軍人と忠誠

第一次世界大戦の勃発当時、ミスリーはエジプトで亡命生活を送つていだし、一九一六年五月六日にはベイルートでジャザーライリーが処刑されたことにより、『盟約協会』は一人の指導的人物を失つてしまつた。だが、そうした状況の中でもミスリーに「ある程度取つて代わつたと思われる」人物の台頭は、結社に転機をもたらすことになる。その人物こそ、ハーシミーに他ならない。彼は『協会』の進むべき方向をどう模索したのだろうか。

イラク地方を管轄する第六軍所属のハーシミーは、バグダードでの勤務を経てモースル第一二軍團參謀長となつていた。⁽⁹⁵⁾ この軍團は『協会』メンバーを多数擁しており、ハーシミーは結社のモースル支部長でもあつた。⁽⁹⁶⁾ 彼のイニシアティヴのもとで『バスラ改革協会』Jam'iya al-Basra al-Islahiyaとの連携を模索するなど、同支部はイラクで活発な活動を展開している。⁽⁹⁷⁾ それが第

一次大戦にともなう軍団のアレッポ異動によつて、ハーシミーは運動の表舞台に登場することになつた。彼はミスリー不在の『協会』を代表して、『青年アラブ協会』⁽⁹⁸⁾との連携や、「ダマスクス議定書」の作成にも関与する。シリアに臨時政府を樹立し、アラビア半島の在地勢力と結ぶといった具体的な「蜂起」プランも、裏づけとなる武力——彼の第一二軍團は「解放軍」Jaysh al-Khalasと呼ばれていたといふ——を有するハーシミーの存在抜きには考えられまい。アラブ・ナショナリズムの言わば「正史」に名高いこうした彼の行動は、ついにオスマン＝アラブ主義から大きく足を踏み出したかに見える。

だがその三年後、「アラブの反乱」のまさに最終舞台となつたパレスティナの前線にオスマン軍第二四師団の師団長として姿を現したのは、誰あろうハーシミーその人であつた。しかも、彼はファイサルの誘い——オスマン軍を離れてアカバに来るようとの招請——をも断つていたのである。⁽⁹⁹⁾ その真意はどこにあつたのか。

ハーシミーは使者に向かつて「アラブ」軍への参加を拒否する理由を次のように語つている。イギリスはファイサルと彼の父に対して誠実ではない。一方でアラブ國家の設立を約束しておきながら、ユダヤ人と同意してバ

ルフォア宣言を出し、フランスにはシリアを与えるという協定を結び、イラクをインドに組み込もうとしているではないか。彼はカイロで発行されている新聞『ムカツタム』を取り出し、イギリス政府の声明文を示して言う。そもそもフサインが自身をアラブ王 (Malik al-Arab) と号しているにもかかわらず、ヒジャーズ王 (Malik al-Hijaz) の称号で呼ぶのは、まさに不実の前兆に他ならない。そしてハーシミーは最後にこう述べるのである。自分は軍人としての責務を放棄するわけには行かない、と。

現在われわれは、その後の歴史が彼の述べた通りに展開したことを知っている。ただ、その的確な状況分析の裏には、もともと彼が前述の「蜂起」⁽¹⁰⁾計画の提携先としてハーシム家に難色を示していたこと、そのせいもあってかファイサル個人との関係もややぎこちないものであつた事情が存在したことを付け加えておくべきかもしれない。⁽¹¹⁾

それにしても、ハーシミーは「蜂起」をそもそも実行に移すつもりだったのだろうか。いずれにせよ、その機会は彼に警戒の念を抱いた軍当局がイスタンブルへの異動を命じたことによつて永遠に失われた。再びパレスティナに現れるまでの時間を、彼はガリポリや東欧での

転戦に費やすことになる。⁽¹²⁾ ファイサルの使者に述べたように、将官にまで登りつめた彼は帝国への忠誠を維持しつづけた。オスマン国民として国家のあり方に対するだけ批判的であつたとしても、軍人としての職務遂行においてはこれに忠実でなければならない。彼の論理には、オスマン＝アラブ主義がもつ「主体化」と「臣民化」の等価性を垣間見ることもできる。しかし、そこから次のような仮説が浮かんでくるのではないか。つまり、彼はミスリーのいないオスマン帝国で《協会》結成の趣旨に忠実であろうとしたのだ、と。「ダマスクス議定書」などへの積極的な関与は、そうすることで運動をコントロールし、アラブ地域における秩序の「空白」——当然英仏の進出が予想される——に備えることにあつたのではないか。ハーシミーは「蜂起」計画へのヒジャーズからの軍事支援の申し出を「アラブ運動の指導者となることについて、シャリーフ・フサインの決心以外のものは必要としません」と断つている。これはハーシム家に対する好惡の感情から出た言葉というよりは、運動の主導権をあくまで自身の掌中に收めつづける意志表明とも受け取れよう。だとすれば、彼はオスマン＝アラブ主義をめぐつて危うい綱渡りをしていたことになる。

ある「転向」の軌跡

ハーシミーのナショナリズムへの接近が「偽装」されたものだとすれば、「アラブの反乱」に進んで身を投じ、のちのアラブ諸国家システムを意味で体現する人物となつたサイードは完全に「転向」を果たしたと言えるだろう。サイード論の多くが彼を「現実主義者」と評していることからすれば、これもその一環であるかもしれない。そうした有力な見解を念頭において、事柄の実態を見定めるのがこの項での課題となる。

第二節で触れたように、サイードはオスマン帝国の存在をもともと否定していない。「帝国では、ムスリムとして、アラブ人はトルコ人のパートナーだつた。彼らは、人種的区別なくトルコ人と権利と責任を共有していた。国家における高位が、軍人や官僚に限らずアラブ人に開かれていた。彼らは議会の上下両院に代表を有していた。多くのアラブ人が大宰相、シャイフ・アル・イスラーム、将軍や州総督となり、アラブ人は国家行政の全ての職位に常に見出せた⁽¹⁰⁾」と述べる彼がトルコ人に格別敵意を抱いていたはずもない。《盟約協会》の「綱領」に賛同していたというムスタファ・ケマル——のアタチュルク——をはじめとして政権中枢から距離をおくトルコ人は、緒戦でイギリス軍に投降して「反乱」に加わった

との親交もあつた。⁽¹¹⁾サイード自身、トルコ系だったとも言われているのである。⁽¹²⁾

では、彼はなぜ「アラブの反乱」に加わることになつたのか。本人はこの間の事情を《統一派》によるパン⁽¹³⁾トルコ運動に帰している。だが、実際のアラブ政治運動の経緯がそれほど単純でないことは、すでにこれまでの行論から明らかにしえたと思う。彼個人の動向に目を向ければ、その転換には大きな跳躍が必要だつたことが分かる。

ミスリーがエジプトに追放されると、イスタンブルにいたサイードはオスマン帝国を出国する決心をした。ミスリーを追つてカイロに向かうか、故郷であるイラクを通つてそのままアラビア半島へ抜けるか。彼は後者を選んだが中途で病に倒れてしまう。病院で治療を受けているうちに第一次大戦が始まり、バスラヘイギリス軍が上陸してきた。回復したサイードはイギリス当局に働きかけ、やがてインド経由でエジプトに向かう。その後の活躍はよく知られているとおりであるが、ここで注意しなければならないのはサイードと「アラブの反乱」に参加した他の軍人たちとの間にある隔たりである。彼の立場は、緒戦でイギリス軍に投降して「反乱」に加わった

『協会』メンバー——大戦以前の結社加入者のうち、「反乱」⁽¹³⁾ 参加者は約三割に過ぎない——とは異なる。また、リビアからオスマン軍人としてサヌーシー教団とともにエジプトに侵攻して捕虜となり、ジャザーアイリーの処刑に衝撃を受けて「アラブ」軍に志願したサイードの義兄アスカリー Ja'far al-'Askari——彼は結社メンバーではなかつた——とも違うだろう。⁽¹⁴⁾ ミスリーを追つてオスマン軍を離れた瞬間に、サイードはもう後戻りできない道を走り始めていたのである。

当時のサイードについて考えるとき、その若さも見逃すこと

すことはできない。われわれは後年の老練な政治家、「現実主義者」サイードをひとまず忘れる必要があるだろう。二六歳という年齢は『協会』幹部の中でも最年少に属する。彼はミスリーやジャザーアイリーらと異なり改良主義的な「青年トルコ」運動の経験もない。「ヌーリー・サイード——彼は私にとって素朴な空想社会主義者のように思われる——は、二五歳くらいの纖細なアラブの若者であり……非常に西洋化されている」とあるイギリス当局者は述べてこう続ける。「彼は……アラブが、他のどこよりもリベラルなイギリスの支配のもとで、より容易に彼ら「アラブ」の理想を達成できると考えてい

⁽¹⁵⁾ る。この「協力メカニズム」(R・ロビンソン)の作動を髪髪とさせるサイードの発言にいかなる思惑が込められていたにせよ、帝国主義を充分に認識していたとは必ずしもいえない。無論、時代の雰囲気もあつた。ヒジャーズに出発する直前、エジプトに滞在していた彼はザグール Sa'd Zaghlul と出会つている。エジプト民族主義者として知られるザグールは、「アラブの反乱」に対する当事者意識はまるでなかつたが、それでもアラブの願望を表現する機会としてサイードに「反乱」への参加を激励したのだつた。

だが、オスマン帝国との訣別に向かいつつあるサイードを一回り年上のミスリーはどうに見ていたのか。両者それぞれと会見したある人物はこんなふうに記している。「しかし、この関係に注目してほしいのだが、彼「サイード」はアジーズ「ミスリー」の信頼を完全には得ていよいようだ。私は、アジーズが彼を疑つていると言おうとしているのではない。ただ私は、彼「ミスリー」が、彼「サイード」はかなり若くてこの種の事柄で完全に信頼するまでには成熟していない、と考えていると思つう」。

第三の道

シャリーフ政府の陸軍大臣から流謫の亡命者へ、「アラブの反乱」におけるミスリーの行動は迷走の軌跡に見える。それゆえにさまざまな批判が各論者によつてなされた。⁽¹⁹⁾ 彼はなぜ「アラブの反乱」から離脱したのか。あらかじめ結論を先取りして言えば、「オスマン」と「アラブ」の二者択一を迫られるなかで、彼の行動の根底にあつたものはオスマン＝アラブ主義の最後の探求だつたのである。

一九一六年二月五日付書簡で、ミスリーはイギリスのキッチナー陸相に對してアラブの政治的傾向を二つの潮流に整理してみせた。⁽²⁰⁾ 第一に、オスマン帝国からの完全な分離とアラブ帝国——その境界として、北はアダナ、ヴァン両州、東はペルシア、バスラ海、オマーン海、西は地中海、エジプト、紅海、南はインド洋——の復興。そして第二に、オーストリア＝ハンガリーに擬せられたトルコ＝アラブ帝国のハンガリーとなること。選択肢のひとつとしてではあるが、彼はついにアラブ独立の可能性を示唆するようになつた。實際、英国外交資料から浮かび上るのは、第一次世界大戦勃発以後、まずその起點としてイラクにおける「蜂起」を主張して、イギリス

の歓心を買おうとするミスリーの姿である。

もつとも、彼の言動は必ずしも一貫しない。だが、われわれはむしろこの一貫性の欠如にこそ注意を向けるべきなのである。イラクにアラブ国家を樹立しても軍事的・経済的に維持が難しい。個人的にはイギリスに併合されたほうが良いと思う。けれども、もし併合しないと確約してくれるなら、イギリス軍に抵抗しないように現地のオスマン軍アラブ人將校やベドウインらを説き伏せよう。このように誘うミスリーは、二の足を踏むイギリス当局者へ向かつて挑発も辞さない。分裂状態にあるアラブは、イギリスとオスマン帝国を秤にかけて強者の陣當につくしかないのだと。⁽²¹⁾ その一方、彼はフランスの当局者にはこのように語っている。「イギリスは、メソポタミア、アラビア【半島】、パレスティナを望んでいる。彼らはイスラーム世界を支配することを欲している」。よつて、「フランスとアラブの努力の結合だけが、トルコに平和を余儀なくさせることができ」イギリスの野心を抑えることも可能だと、ミスリーはフランスの自尊心をくすぐるのである。こうして英仏両国を牽制したうえで、オスマン帝国の第一次大戦への参戦に動搖する《盟約協会》メンバーに對しては、安易に外国の誘惑に乗ら

ないよう自制を求める。⁽¹²⁵⁾ ここまでくれば、彼の姿勢はある原則にもとづくものであることが判るだろう。

その手がかりを彼自身の言葉から求めることができる。「われわれは、戦争の欲求から、トルコへの憎悪から、あるいはイギリスへの好意から戦うのではない。われわれの大**地**の解放⁽¹²⁶⁾ (tahrir) とその自律 (istiqal) の保障のために戦うのだ」。アラブ帝国の復興にせよ、オスマン帝国にとどまる——むろん現存支配体制は打破されねばならないが——にせよ、彼にとつて重要なのは、「解放」と「自律」である。ミスリーは英仏両国に幻想を抱いてはいなかつた。「新たなアラブ諸国家が樹立されたとしても、それがインドや北アフリカにおける“西洋帝国主義”のための道具となつてはならない」⁽¹²⁷⁾。では、彼は「解放」や「自律」を具体的にどのように実践しようとしていたのか。彼が「蜂起」計画を英仏両国に執拗にもちかけたのは、單なる牽制以上の苦肉の策によるものだつたように思われる。ミスリーは一介の追放者に過ぎず、また彼に対する警戒も根強い⁽¹²⁸⁾。いかなるかたちであれ、まず闘争の基盤を確保することが先決であった。その先のプランとしてミスリーの念頭にあつたのは、キッチナーに示した二つの選択肢のいずれでもなく、やはり

例の「東地中海國家」構想の改訂版だつたはずである。⁽¹²⁹⁾ 「それは四ないし五つに分割された自治國家からなるもの」で、(1) ヨーロッパ・トルコ、アナトリア、(2) クルディスタン⁽¹³⁰⁾、(3) アラブ・トルコ、(4) ヒジャーズ、アシール、イエメンから構成される。⁽¹³¹⁾ フサインの処遇が問題となるが、彼はヒジャーズ王としてちょうどドイツ皇帝——ここではもちろんオスマン家のスルタンIIカリフ——に対するバイエルン王のような立場に過ぎない。⁽¹³²⁾ 「クルディスタン」の設定はこの構想の出色であるが、《協会》に最後まで残つたクルド人の存在が、ミスリーにそつらせたように思われる⁽¹³³⁾。しかし、彼の構想は周囲に十分理解されたとはいえない。イギリス当局者は次のようなコメントを記している。「彼らは「アラブ」の The Metropolitan State (コンスタンティノープル、アナトリア) との連合は…大英帝国とその植民地もしくは自治領のようなものである」。ミスリー本人ですら、おそらく無知ゆえに「オーストリアとハンガリーの関係のようなもの」と注釈を加えている。オーストリア＝ハンガリーがスラヴ諸民族の犠牲の上に成立したことを探つていれば、そのようなアナロジーを持ち出すことはなかつたであろう。「東地中海國家」が当時の

常識からして、いかに表現困難な願望だつたかが窺われる。

英仏との駆け引きがはかばかしくない状況で、イギリスの保護・後見のもと「アラブの反乱」の盟主となつたフサインに対するミスリーの評価が低いのは、「解放」と「自律」の原則からいって当然だつた。個人的能力はともかく、フサインは軍事指導者としての素質に欠けてゐる。さらに問題なのは「民衆の革命運動への猜疑心を特に強く抱き：ロシア皇帝の廃位にひどくショックを受け不安に駆られていた」彼の姿だつた。かつての「青年トルコ人」ミスリーの眼には、フサインがアブデュルハミト一世と二重写しになつて見える。⁽¹³⁾エジプト副王アッバース・ヒルミーとの個人的関係やイブン・サウードへの働きかけも何ら生み出すことはなかつた。完全にイニシアティヴを奪われるかたちとなつたミスリーはイギリスの要請で不本意ながらビジャーズに向かう。とはいへ、これで彼は熱望した道具立てをついに手に入れたことになる。構想の実現をあせつてフサインとことごとく対立したミスリーは、メディナのオスマン軍と連携してフサインを排撃するという一種のクーデタを図つた。だが、政治的な術策を弄しすぎた彼に従う者はもはやほとんど

いない。ミスリーは辞職して、失意のうちにエジプトへ戻らざるを得なかつた。⁽¹⁴⁾

一九一八年初頭、気を取り直した彼はドイツ経由で今度はイスタンブル入りするため、中立国のスペインに向かう。しかしスペインから出ることすらかなわず、むなしく時間が経過していく。そんな彼にとって、ドイツ敗北の知らせは絶望のあまり自死すら考えさせるほどの衝撃だつた。第一次世界大戦の終焉は「東地中海國家」構想の最終的な破綻を意味していた。彼にとって、オスマン帝国は構想の中核となるべきかけがえのないものだつたのである。そうした帝国に対する愛憎を超えた感情は、意外にも、不俱戴天の敵であるエンヴエル・パシャへの書簡に表れていたともいえるのではないか。

私は今日付でオスマン軍を去りますが、過去の軍隊生活は私を固い絆に結びつけ、その日々を胸の奥に刻みつけています。よつて、もし戦争が起こり、祖国(watan)がその息子たちを必要としたならば、陸軍大臣閣下は、私を指揮させる部隊に任命するためにはエジプトのオスマン政府代表部を通じて私の滞在場所をお探し下さい。

だが、もちろんそれは彼が現存のオスマン政府を肯定

していふことを意味するわけではない。のちに、エン・ヴェルは反英活動にアラブを利用するため、ミスリーを本当に呼び戻そうとしたが拒絶されたようである。⁽¹³⁸⁾ ミスリーはあるフランス当局者との会見で、彼の真意を測りかねてゐる当局者の疑惑に反発して次のように答えたが、これほどオスマン＝アラブ主義のスタンスを端的に説明して見せた言葉はないだろう。

あなたは、私がトルコ人に対する裏切りのために活動していると思われるのですか。決してそうではない。私は権力を握り帝国を敗北に導こうとしている党「《統一派》」に対して戦つているのです。⁽¹³⁹⁾ そして私の計画の実行だけが、救いの道なのです。

六 結語

一九一八年一〇月三日、ファイサルがダマスクスに入城して、「アラブの反乱」はそのクライマックスを迎えた。アントニウスはこう書いている。

「ファイサルの入城は」市民にとつて自由の実現のようと思われ、彼らにとつてその自由とは、トルコの桎梏からの脱却だけに止まらず、同時に長年抱いた夢が実現したことを意味したのである。

アントニウスが同時代人として、オスマン帝国からの独立を「長年抱いた夢」と言い切ったとき、オスマン＝アラブ主義者たちのディレンマは熱狂の中で忘れ去られたのであろうか。ところがこうした「正史」とは裏腹に、その後の修正論的な諸研究は、ファイサルを戴く「シリア王国」を構成したのがかつての「体制派」オスマン主義者——《統一派》の支配のもとではほとんど沈黙していたにもかかわらず、今や権力の座についた——であつた現実をわれわれに教えてくれる。つまり、ありていに言えば、運動を推し進めて厳しい戦いを潜り抜けてきた者たちは、その恩恵を享受した者たちと必ずしも同一人物ではなかつたということになるだろう。⁽¹⁴⁰⁾ これを第一次大戦以前のアラブ・ナショナリズムの限界と見なす、あるいは「普遍」的性格の類似によるオスマン主義からアラブ・ナショナリズムへのパラレルな移行として捉えるのはたやすい。だが、問題は残る。果たしてオスマン＝アラブ主義者の位置づけはどうなされるべきなのか。オスマン＝アラブ主義は単なるプロセスとして捉えられるべきなのか。最後にそれを検討しなければならない。

オスマン＝アラブ主義は、「普遍」オスマン主義の変種である「特殊」オスマン主義に対する抵抗であつたと

みなしうる。この「特殊」オスマン主義はトルコ・ナショナリズムやトゥラン主義を内に含みつつ、必要に応じて「イスラーム」をも効果的に利用するものであった。オスマン＝アラブ主義者は、これを本来的「普遍」オスマン主義からの逸脱と見なし、逆にオスマン主義の「普遍」性を拠りどころとして帝国の多民族国家への変革を求めたのである。ただし、アラブ側による「普遍」オスマン主義解釈はひとつの問題を孕んでいた。元来オスマン主義は、オスマン・「ステイト」に民族・宗教を超えた、つまり一元化されたオスマン・「ネイション」を創造する思想であり、アラブの個別性を構成要素におくオスマン＝アラブ主義者の主張とは矛盾する。だが、支配的イデオロギーが「トルコ化」政策とオスマン主義の欺瞞的な関係の產物である以上、被統治者側は「普遍」の主体的な読み換えを行なうことでこれと対抗せざるをえなかつた。つまり、彼らは「ネイション」と「ステイト」⁽⁴⁾を峻別することにその論理を見出したのである。

しかし、こうした抵抗のあり方は常に危険と隣り合わせである。事実、オスマン＝アラブ主義者内部に「普遍」の定義や運動の手法をめぐって分断線が走っていたことは疑い得ない。まず一方に、アラブ会議に参加した

グループがある。彼らはアラブという個別的アイデンティティを強調し、ナショナル・マイノリティとして自らにふさわしい地位をオスマン帝国内部で確保しようとした。だが、この「アイデンティティ・ポリティクス」は利権交渉のプロセスを経ることによつて、多かれ少なかれ、普遍的合意の見せかけのもと安易な妥協がなされがちである。その結果、被統治者側は固有の場所を割り振られることで運動の政治性を剥奪されてしまう。なぜなら、イデオロギーに対する虚偽意識を統治・被統治両者ともに共有してしまつてゐるからである。加えてシリアという共同性への傾斜は、政府が帝国の「イスラーム」による一体性を強調していくなかで、ムスリム・キリスト教徒間の微妙な関係を逆に浮き彫りにしたように思われる。

それに対し、《盟約協会》はオスマン主義をむしろ真面目に受け取ることで、妥協的な制度の破壊を意図した。「盟約」というシニフィアン、アラブのみではない多民族からなるメンバー、多元主義に「東地中海人」の同質性をも加味した「東地中海国家」構想のもと、より「普遍」的なものへの同一化——「眞の」オスマン主義——を目指したのである。「国民」としての平等性の希求と

「民族」としての自己正当化がもたらす陥穀との相克のなかで、民族的アイデンティティよりさらに視野を拡大したこの構想には、帝国主義体制における「差別の克服と連帶の獲得」⁽¹⁵⁾への希望が萌芽的なものにせよ孕まれていたとはいえない。ただし、オスマン＝アラブ主義を特徴づける内容と形式の間にある緊張関係は蔽うべくもない。彼らの多元主義という積極的な教義も、たいていの場合、秘密結社という表現方法や組織形態と明らかに衝突していたのである。

こうした抵抗運動に統治者側はどう対応しようとしたのであろうか。当然のことながら、自らの政治的枠組に再度包摶しようとする事になる。その際、アラブ会議と《協会》それぞれの区別が行なわれたことは、両者の性格の相違を逆に立証するものだろう。つまり、前者を理性的な議論の対象としたのに対し、後者には国家への反逆者であるとの烙印（ステイグマ）を押したのだった。しかし、これはむしろ状況を政治化してしまい、ミスリー裁判はアラブによるオスマン帝国からの離反を決定づける一因となってしまう。

オスマン帝国から「シリア王国」——オスマン主義からアラブ・ナショナリズム——への移行に際して何が起

こつたのか。事後の見れば、アラブ・ナショナリズムの歴史は常に法則に支配された過程として、つまり一連の意味あるプロセスとして読むことができるかもしれない。《協会》ですら、ある一面を取り上げさえすればそうした読みは可能であるし、実際に行なわれてもきた。だが、プロセスに身を置く当事者にとって事態は決して必然なものではない。それどころか未決定な可能性としてそれぞれの決断を迫られているのである。われわれがオスマン＝アラブ主義者、とりわけ《盟約協会》の行動を通じて、既存体制の崩壊から新秩序の誕生の間隙に目撃するのは、ある種の亀裂＝「開かれ」だったといえるだろう。すなわち「ネイション」と「ステイト」との間の「開かれ」である。彼らのオスマン帝国へのパトリオティズム（愛国主義）は、統治者側が「トルコ化」によって想像＝創造しようとした「ネイション」ではなく、「ステйт」としての帝国への情熱と利害に裏打ちされたものだったろう。と同時に、アラブ・「ネイション」に対する記憶と忠誠も彼らにとつては自明のことであつた。⁽¹⁶⁾しかし、新たなシステム——「アラブの反乱」の成果としての「シリア王国」——が自らを（一時的にせよ）確立した瞬間にオスマン＝アラブ主義者は不可視と

なる。ザフラー・ウイー・ジャザーイリーらは字義どおり「消失」することでナショナリストとなり、さらに《協会》の場合、民族主義結社として転形を遂げた挙句、「イラク」「シリア」一派に分裂した。⁽¹⁾彼らの自壊には、「消え行く媒介者 vanishing mediator」のアイロニーがある。われわれがオスマン＝アラブ主義者を「国民国家」形成やナショナリズムの観点から過小評価せざるを得ないとすれば、それは彼らがむしろ「消え行く媒介者」としての役割を全うした結果なのである。われわれはオスマン＝アラブ主義が仲介することなしには、直接的にオスマン主義からアラブ・ナショナリズムへ移行することはできなかつたことを、まず押さえが必要があるだろう。「消え行く媒介者」は状況の未決性が失われ、大文字の歴史が直線的進化の自明性を獲得した瞬間に見えなくなる。こうしてオスマン＝アラブ主義者は、新たに台頭した支配的イデオロギーによる創造の産物——「シリア王国」——を前にしてその役割を終えたのだった。⁽²⁾

ここで《協会》のその後の運命をたどるのはもはや本稿の課題を越えている。《協会》のメンバーが、自分たちが実際に得たものではなく、何か別のものを欲していく

たといふ」と、つまり、多様な名義（「盟約」や「東地中海国家」など）によって示される、不可能な充溢性に満ちたユートピア的対象を求めていたことは、もはや明らかであろう。しかし、第一次大戦後の状況は、彼らをして「国民国家」という新たな共同性のなかに絡め取られる⁽³⁾ことを余儀なくさせた。それは、ハーシミー・サイードをイラクの寡頭政治家とし、ミスリーをすら一九五一年のエジプト「革命の靈父」たらしめるほどに苛烈なものだったのである。

註

- (1) オスマン主義の様々なヴァリエーションに関する次を参照。Arai, Masami, *Turkish Nationalism in the Young Turk Era*, Leiden, E.J. Brill, 1992. 新井政美「ムスタファ・レシット・パシャからアフメット・アーキフへ——「オスマン国民」概念の淵源と影響とに関する素描」『人文研究』第四四卷第一二分冊（一九九一年）、九八一一〇〇〇頁。いわゆる「トルコ化」については議論の分かれるところだが、その問題の本質は実際の政策云々にあるというより、政府による集権主義とトルコ・ナショナリズムの無自覚な結びつきにこそあつたのではないか。後述するように、「トルコ化」を批判していたのは「帝国からの分離独立を図る人々」のみではなかつたことが、逆にそれを証明している。同『トルコ近現代史——イス

ラム国家から国民国家へ』みすず書房、一九〇〇年、一

三〇頁。

the Arab National Movement (rep. edn), Beirut, Khayats,

1969. フレーチ・アンドニウス 木村申一訳『アラブの
日覚め——アラブ民族運動物語』第三書館、一九八九年。
原書は一九三八年にロンドンの Hamish Hamilton から刊

むねだ。画書の「ナショナル」の語彙に題や参考書
の立場からいの検査によっては次の參照。Cleveland, William L., "The Arab Nationalism of George Antonius Recon- sidered", in J. Jankowski and I. Gershoni (eds.), *Rethinking Nationalism in the Arab Middle East*, New York, Columbia University Press, 1987, pp. 65-86.

(4) Dawn, "The Rise of Arabism in Syria", *op. cit.*, pp.

(5) ある「は帝国の「イスラーム国家」志向を強調し、ナショナリズムの役割を重く見ないイスラーム主義的修正論もありえよう。最近の一例として、アラブ、欧米のみ
lan, 1981, pp193-215. 田杵陽「アラブ民族主義の再検討」『歴史学研究』五三三四号（一九八四年）、一一四一—三一頁。

- (3) Antonius, George, *The Arab Awakening: The Story of*

を参照。Kayal, Hasan, *Arabs and Young Turks: Ottomanism, Arabism, and Islamism in the Ottoman Empire, 1908-1918*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1997.

(6) オスマーン主義の定義をオスマーン国家の維持を究極的な目的とするある政治原理として拡張した場合、ハリード・アラブ・ナリズムのアラブ主義をアラブによる分権的あるいは多元的なオスマーン主義と見なす」とも可能だらう。だが、近年のオスマーン帝国史研究において常識に属するこうしたオスマーン主義の拡張的解釈は、前掲註4で示したように「アラブ主義」が分権論的なニュアンスを含む以上、アラブ・ナリズム研究との比較分析の際にかえつて混乱をきたしてしまつ。分権あるいは多元的といつても、それがイスタンブルからの視点なのか、もしくは周辺諸地域からのものなのかでかなりニュアンスが異なつてくるだらう。本稿の関心は、むしろ分権論内部の様々な潮流を分類してみるとあるが、誰にとっての分権論かをまず明確にするためにオスマーン＝アラブ主義の語を用い、オスマーン主義に関するタントマート以来の狭義の定義を採ることにする。なお、ハリード・アラブ・ナリズムはハプスブルク帝国のチュコ人による「オーストリア＝スラヴ主義」を下敷きにしているが、多民族国家における政治的マイノリティとしての両者の符合も検討すべき論点といえる。なかでも「バラツキー書簡」は、支配イデオロギーとしてのオーストリア理念をチュコ側が読み換えた事例として評価できよ。

オスマン＝アラブ主義者のディレクタ

同書簡の全訳については、矢田俊隆『ハプスブルク帝国史研究』岩波書店、一九七七年、101—109頁を見よ。

(7) その対象として取り上げるのは次の通り。サリーム・アル＝ジヤザーリー Salim al-Jazā'iri (一八七九—一九一六年)、ヤーンー・ハル＝ハーンー Yāsin al-Hashimi (一八八一—一九三七年)、ヌーリー・アツ＝サヘーデ Nūrī al-Sā'īd (一八八八—一九五八年)。

(8) ペロフニシニハムの軍隊の独特な性格を體いたるのに次の文献がある。Finer, S.E., *The Man on Horseback: The Role of Military in Politics* (2nd edn), Boulder and London, Westview Press and Pinter, 1988. オスマーン帝国のケースに限れば、鈴木董「近代軍」形成期のオスマーン帝国における軍人と政治——一八一六—一九〇八年——日本政治学会『年報政治学——近代化過程における政軍関係』岩波書店、一九八九年、一八七—一〇九頁。

(9) Tauber, Eliezer, *The Emergence of the Arab Movements*, London, Frank Cass, 1993; idem, *The Arab Movements in World War I*, London, Frank Cass, 1993; idem, *The Formation of Modern Syria and Iraq*, London, Frank Cass, 1995. その他《協約》を本格的に扱った社田雅也の研究ノード、ハッサン・サアブの著作がある。以下の特徴的なタイトルが示すよべに、一見われわれの問題意識と通底するが、アラブ・ナリズムの隆盛ところへ時代状況に多分に影響を受けたことが窺われる。Saab, Hassan, *The Arab Federalists of the Ottoman Empire*, Amsterdam,

- Djambatan, 1958. なお本稿が扱う時期について邦語の包括的な研究として木村喜博『東アラブ国家形成の研究』アシア経済研究所、一九八七年、酒井啓子「イラクにおける国家形成と政治組織（一九〇八—一九〇年）」酒井編『国家・部族・アイドントイヤー—アラブ社会の国民形成』、アシア経済研究所、一九九二年、七九—一四二一頁。⁽¹²⁾
- 〔12〕 「青年トルコ」運動の多様な運動形態に関する次を参照。Hanoğlu, M. Sükrü, *The Young Turks in Opposition*, Oxford and New York, Oxford University Press, 1995. 著者による人のトルコ語による著者名。⁽¹³⁾ *The Young Turks and the Arabs before the Revolution of 1908*, in Khalidi, et al (eds.), *op. cit.*, pp. 31-49.
- 〔14〕 ヘルムザイー政府の閣僚としてのアラビーを参照。Akarlı, Engin, "Abdulhamid II's Attempt to Integrate Arab into the Ottoman System", in D. Kushner (ed.), *Palestine in the Late Ottoman Period*, Jerusalem and Leiden, Yad Izhak Ben-Zvi and E.J. Brill, 1986, pp. 74-89; Blake, Corinne, "Training Arab-Ottoman Bureaucrats: Syrian Graduates of the Mülkiye Mektebi 1890-1920", Ph.D.diss., Princeton University, 1991.
- 〔15〕 画報社はバベーリヤナベーレ教徒がアルマニヤ画報で構成された。Sa'id, Amin. 1934. *al-Thawra al-'Arabiya al-Kubrā*, al-Qāhirah, Matba'a Isā al-Bāni al-Halabī, 1934, Vol.1, pp. 18-23.
- 〔16〕 一九一一年英國の支那のアルマニヤ。Ibid., pp. 14-18; [As'ad Dāghir], *Thawrat al-'Arab: Muqaddimātihā, Asbūbihā*, wa Natā'ijuhā, al-Qāhirah, Matba'a al-Muqatṭam, 1916, pp. 57-62. 参照 Thawrat al-'Arab の翻訳。⁽¹⁷⁾
- 〔17〕 一九〇九年組成の秘密機関。Sa'id, al-Thawra..., p. 9; Darwaza, Muhammad 'Izzat, *Hawla al-Haraka al-'Arabiya al-Hadītha*, Saydā, al-Maktaba al-'Asriya, 1949-1952, Vol.1, pp. 27, 30.
- 〔18〕 彼の略傳での著者の體裁を参照。Tarabein, Ahmed, "Abd al-Hamid al-Zahrawi: The Career and Thought of an Arab Nationalist", in Khalidi, et al. (eds.), *op. cit.*, pp. 97-119.
- 〔19〕 [al-Khatib, Muhibb al-Din], *al-Mu'tamar al-'Arabi al-Awāl al-Murāqid fī al-Qā'at al-Kubrā li-Jam'iya al-Jughrāfiya bi-Shāri'a San Jim'an fī Baris*, al-Qāhirah, al-Lajna al-Ullaya li-Hizb al-Lāmarkaziya, 1913/1333, p. 7. 参照 *al-Mu'tamar* の翻訳。
- 〔20〕 Ibid., pp. 113-119; Müsə, Sulaymān, *al-Haraka al-'Arabiya: Sira al-Marhala al-Ūlā til-Nahda al-'Arabiya al-Hadītha, 1908-1924* (3rd ed.), Bayrūt, Dār Nahār, 1986, pp. 39-40.
- 〔21〕 Ibid., p. 38. 参照ヘルムザイーの略傳。Cleveland, William L., *Islam Against the West: Shakib Arslan and the Campaign for Islamic Nationalism*, Austin, University of Texas Press, 1985, ch. 1.
- 〔22〕 *al-Mu'ayyad* (3. 5. 1913), p. 4. Haddad, *op. cit.*, p. 217 参照。
- 〔23〕 一九一一年英國の支那のアルマニヤ。Ibid., pp. 14-18; [As'ad Dāghir], *Thawrat al-'Arab: Muqaddimātihā, Asbūbihā*,

の発明。al-*Mu'tamar*, pp. 66-74.

- (25) Salibi, Kamal S., "Beirut under the Young Turks: As Depicted in the Political Memoirs of Salim 'Ali Salām", dans J. Bergue et D. Chevallier (dir.), *Les Arabes par leurs archives, XVIe-XXe siècles*, pp. 193-215, Paris, CNRS, 1976, p. 210. **アラブ民族主義者としてのアラブ民族主義者たちの記述（*al-Mu'tamar*, pp. 46ff.)**

(26) Sa'īd, *op. cit.*, p. 210.

(27) Sa'īd, *al-Thawra...*, p. 43; Haim, Sylvia G. (ed.), *Arab Nationalism: An Anthology*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1962, p. 33.

(28) **アラブ民族主義者としてのアラブ民族主義者たちの記述（*al-Mu'tamar*, pp. 46ff.)**

(29) Tibā'a, 1959, p. 70.

(30) al-Basīr, Muhammad Mahdi, *Tā'rīkh al-Qađīya al-Trāqīya* (2nd edn), London, LAAM, 1990, p. 25.

(31) *al-Mu'tamar*, p. 150-210; Ahmad Shafiq, *Mudhakkiratī fi Niṣf Qarn*, al-Qahira, Dār Majallatī, n.d., Vol.3, p. 82.

(32) **アラブ民族主義者としてのアラブ民族主義者たちの記述（*al-Mu'tamar*, pp. 46ff.)**

(33) Ahmad Shafīq, *op. cit.*, Vol.3, p. 82. **アラブ民族主義者としてのアラブ民族主義者たちの記述（*al-Mu'tamar*, pp. 46ff.)**

(34) [註] 日本人廿’七八歳を軍人^{ハサウエ}と^{ハサウエ}。Tauber, *Emergence...*, p. 297. **アラブ民族主義者としてのアラブ民族主義者たちの記述（*al-Mu'tamar*, pp. 46ff.)**

(35) Jam'iya al-Qaħtanija に参加して「だた。だが、その活動は秘密保持に失敗——その結果は明るかでないが——したたかに事実上解散や消滅を免なからず。メハバードでは軍人に限定した理由には体制に妥協的な知識人に対する不信任感がある。Antonius, *op. cit.*, p. 119. **アラブ民族主義者としてのアラブ民族主義者たちの記述（*al-Mu'tamar*, pp. 46ff.)**

(36) Birrū, Tawfiq, *al-'Arab wa al-Turk fi al-'Ahd al-Dusturi al-Uthmāni 1908-1914* (2nd edn), Dimashq, Dār Ṭalās, 1991, p. 454.

Misri and the Arab Nationalist Movement", in A. Hourani (ed.), *St Antony's Papers*, 17, *Middle Eastern Affairs*, 4, London, Oxford University Press, 1965, p. 149. 湿ルノ艶サ "ムニニーの證據トアム" ノヘ "スルカムトセム" PRO. FO. ル盤トア) 882/15. [al-Faruqi, Muhammad Sharif], "Statement of Captain 'X.'", (12. 9. 1915).

(34) Sa'id, *al-Thawra...*, Vol. 1, pp. 46-47.

(35) 頭バクシ・エヒトセドウラムセムニノの教団を評議した船分が欠落トヘズ ^ノ al-Basir, *op. cit.*, p. 25; 'Aziz Bek, *Sūrīya wa Lubnān fī al-Harb al-'Ālamīya: al-Istikhhārāt wa al-Jāsūsīya fī al-Dawla al-'Uthmāniyya*, Bayrūt, 1933, p. 29. ヘ"ハーケ・グクゼ' ホベマハ政府の保安情報局長 (mudīr al-ann al-'ilm) を務めた人物。

(36) 一重帝国構想を《カフターン協会》と結びつけた連説は史料的に疑問の点が多く、英國外交資料にみれば、同

結社は「アラブがオスマン帝国におけるトルコとの同権を享受すル」を謳うが具体性には乏しく、同構想は

《開約協会》のものトヘズ ^ノ。一方、ハベーネーの《協

会》 = 一重帝国構想アム知提トヘズ ^ノ。PRO.FO. 882/24, "Note by the Arab Bureau, Cairo, on the A.H.D. Committee or Committee of the Covenant", (4.1919); al-

Shihabi, Mustafa, *Muhādarāt 'an al-Qawmiyya al-'Arabiyya: Tārīkhuhā wa Qawāmuha wa Marāniha*, al-Qāhira, Ma'had al-Dirāsāt al-'Arabiya al-'Ariya, 1958, pp. 78-79. 藩黒リ

ルスヘザ' Harran, Tag el-Sir Ahmet, "The Young Turks

and the Arabs: The Role of Arab Societies in the Turkish-Arab Relations in the Period 1908-1914", in Hacettepe Üniversitesi Türkiye ve Orta Doğu Araştırmaları Enstitüsü (ed.), *Türk-Arap İlişkileri: Geçmişte, Bugün ve Gelecekte*, Ankara, 1980, pp. 197-198.

(37) "ムニニーがイベタハナムを去るムニニムハレ 級社の多民族性が失なれたムヌカム" ハズ ^ノ Khadduri, "Aziz 'Ali...", pp. 149-150; Birru, *op. cit.*, p. 454.

(38) *Ibid.*

(39) Qadri, Ahmad, *Mudhakkirāt 'an al-Thawra al-'Arabiyya al-Kubrā*, Dimashq, Matābi' Ibn Zaydūn, 1956, p. 14.

(40) むねんメニカ国家が現実に「普遍的なる」を有してこだかムハカは別問題である。ハの点に關し、呉州国

とオスマン帝国を簡潔に比較したるのトコレ、鈴木董「多民族国家の光と影 アメリカ合衆国とオスマン帝国」『アメリカ史研究』第一七号（一九九四年）、一一一—一五頁。

(41) Birru, *op. cit.*, p. 454. "スリーの談話によるの条項は他の資料では見当たらない。

(42) ハッセル大尉はハラ書ヒテム。ハの運動は全く宗宗教から独立しておらず、やれキリスト=イスラームやアラブ人カリフ運動とは別物である。運動は、ハラした理由により（カイロの）シャイフ・ラシード・リダーハのようない有力な原理主義者 (fanatics) の支援を得て、ハラ...彼「ムスリー」はハコトのキリスト教徒やムルーズ派の大多数が彼の側に付いていた。PRO. FO.

"Precis of Conversation with Abd el Aziz el Masri, on

3 · 4 (1980), pp. 226-259.

PRO. FO. 371/2140/46261. Cheetham to Grey, no. 143
(Cairo, 24. 8. 1914). © ፻፲፻ Burdett, Anita L.P. (ed.),
Arab Dissident Movement 1905-1955, [London], Archive

(43) ミスリーのプロフィールに関してはハッドウーリーの

عبدالعزيز مصطفى عبد العزىز ... ‘Azīz al-Miṣrī Yataḥaddathu ilā al-Ahrām”, *al-Ahrām* (21. 7. 1958) ; Subayḥ, Muḥammad, *Batal Lā Nansāḥū: ‘Azīz al-Miṣrī wa ‘Aṣmūhū*, Saydā’ and Bayrūt, al-Maktaba al-‘Aṣriyya, [1971]; Burj, ‘Abd al-Rahmān, *‘Azīz al-Miṣrī wa al-Haraka al-‘Arabiyya*, 1908-1916, al-Qāhirah, Markaz al-Dirāsāt al-Siyāsiyya wa al-Iṣṭrāṭijya bil-Ahrām, 1979; Abū al-Majd, Sabrī, ‘Azīz ‘Alī al-Miṣrī wa Ṣabīḥ: *Banāt al-Wahda al-‘Arabiyya wa al-Islāmiyya*, 1900-1916, al-Qāhirah, al-Hay'a al-Miṣriyya al-‘Āmma lil-Kitāb, 1990.

(44) Djemal Pasha, *Memories of a Turkish Statesman*, New York, G.H. Doran, 1922, pp. 60-61.

York, G.H. Doran, 1922, pp. 60-61.

(45) Birru, *op. cit.*, pp. 207-210.

(46) Goldschmidt, Arthur, Jr. (trans.), *The Memoirs and Di-*

1868-1919, San Francisco, Mellen University Research Press, 1992, p. 89. ハラルト・エーベルハルト著『アラブ人の歴史』、Jankowski, James, "Ottomanism and Arabism in Egypt 1860-1914", *Muslim World*, Vol. 70, No.

オスマン＝アラブ主義者のデイレンマ

(47) 彼は当初、エジプト紙 *al-Ahram* のインタヴューに答えて人員・物資の不足をその理由に挙げ、さらにサヌーシー教団との戦術上の「確執」を仄めかしていた。だが、この「確執」には、ミスリーによる公費流用疑惑も含まれていたらしい。後述するように、彼は軍法会議にかけられてサヌーシー問題も審理の対象となる。しかし、裁判の思わぬ政治化は、逆に彼を窮地から救う。いずれにせよ、晩年になると彼は上記の疑惑に関してはエンゲルの陰謀として、コムアからの「離脱」については口を開かずようになった。アラブ・ナショナリズムの全盛期において、かつてのオスマーン＝アラブ主義者として「語りえない」出来事の一端を述べたか。Stoddard, Philip Hendrick, "The Ottoman Government and the Arabs, 1911-1918: A Preliminary Study of the Teskilat-i Mahsusa", Ph. D. diss., Princeton University, 1963, pp. 92-93, 209.

(48) イスタンブルに来るまで彼はシャーヒリエ Shahiliye と ハチエルケス系のフードニー・ホームを名乗っていた。また後年には、英國のイラク高等弁務官 H. ドーブズによる「トルコ人呼ばねえやねん」。Khaduri, "Aziz Ah...", p. 145, 157.

人中大半は及ばず。 Tauber, *Emergence...*, p. 290. ベラク

生れたる軍人——〇人のうち、人種が別やうだらうへ誰
もわざわざ。 Lawrence, T. E., *Seven Pillars of Wisdom: A*

Triumph (rep. edn), London, Cape, 1988, p. 23. フ・エ・ロ
ンハバ、相應に『軍艦の七柱』半凡社、一九六九年、
第一卷、二二四頁。

(51) ベラク生れたる軍人を調べて、その統計。 Batatu, Han-
na, *The Old Social Classes and the Revolutionary Movements*
*of Iraq: A Study of Iraq's Old Landed and Commercial Clas-
ses and of its Communists, Ba'thists and Free Officers*. Prin-
ceton, Princeton University Press, 1978, pp. 195-205,

319-361. さて、——、ナーナー、アルベニス等の口口にて
之の二つは次の如く記述される。 al-Qaysi, Sāmī 'Abd al-
Hāfiẓ, *Yāsīn al-Hāshimī wa dawaruhu fi al-Siyāsa al-
Irāqiyya Bayna 'amai, 1922-1936*, Vol. 1, al-Basra, Matba'a
Hadād, 1975; Birdwood, Lord, *Nuri as-Sa'īd: A Study in
Arab Leadership*, London, Cassell, 1959; Khadduri, Majid,
Arab Contemporaries: The Role of Personalities in Politics,
Baltimore and London, The Johns Hopkins University
Press, 1973, pp. 19-42.

(52) Simon, Reeva S., "The Education of an Iraqi Ottoman
Army Officer", in Khalidi, et al. (eds.), *op. cit.*, p. 153.

(53) al-Basīr, *op. cit.*, p. 25.
(54) 象徴的な事例として、ナーナーの教訓を翻訳したる文
ある「ゲターブの少年学校スタッフの「ムルカ化」——
外国人教育からの抵抗——」題め押してゐたのが、

——を擧げよう。 Simon, *loc. cit.*, p. 157)。

(55) Burdett, *op. cit.*, vol. 1, p. 151; Tauber, *Emergence...*, p.
213.

(56) *Ibid.*, p. 223; Bray, N.N.E., *Shifting Sands* (rep. edn),
New York, AMS Press, 1974, pp. 45-46.

(57) al-Hashimi, Taha, *Mudhakirat Taha al-Hāshimī, 1919-
1943*, Bayrūt, Dār al-Talī'a, 1967, p. 6. たゞ、《協約》書
籍。 ヤーハー、ハセブ。 ベルトランの出現へ回かへ演じての
「戦争」、「内戦」。

(58) al-Sa'īd, Nūrī, *Mudhakirat Nūrī al-Sa'īd 'an al-Harakāt
al-'Askarīya lil-Jaysh al-'Arabī fi al-Hijāz wa Sūriya, 1916-
1918* (2nd edn), Bayrūt, al-Dār al-'Arabiya lil-Mausū'āt,
1987, p. 20.

(59) Rida, *loc. cit.*, p. 179.

(60) 軍事と政治とに對する態度の動向を記す。
Prätor, Sabine, *Der arabische Faktor in der jungtürkischen
Politik. Eine Studie zum osmanischen Parlament der II. Kon-
stitution, 1908-1918*, Berlin, K. Schwarz, 1993.

(61) たゞ、現実政治は改めて検証を要す。「ムルカ化」
の如きの如きの問題として、ナーナーの盟友であつた二
人への恩典を記す。 Haddad, Mahmoud, "Arab Religious
Nationalism in the Colonial Era: Rereading Rashid Rida's
Ideas on the Caliphate", *Journal of the American Oriental
Society*, Vol.117, No.2(1997), pp. 253-277.
(62) タク・ベルトランの内戦に対する見解。

「なぜそれ〔結社の「綱領〕〕を公表しないのか?たとえ
そうしてもトルコ人は喜ぶだろう。この結社が國家の護
寺のところの組織であることを保証してやるではなハが」。

Ahmad Shafiq, *op. cit.*, vol.3, p. 82.

(63) 'Aziz Bek, *op. cit.*, pp. 22-29.

(64) Djemal Pasha, *op. cit.*, p. 61.

(65) Birru, *op. cit.*, pp. 455; Dāghir, *op. cit.*, p. 36.
 (66) [לְמַרְאֵת] בָּשָׁהֵל תְּדַהֲהֵל 'גַּם אֶל-מִסָּאֵת] אֶל-סִינְנָת-

(60) *Jamal Basnal, Iqanai an al-masa ni ar-Syasya auar Jarat Tadqiqahā bi-Dhuān al-Harb al-'Urfi al-Mutashakkil bi-*

Idāhāt ۲۷۰

(67) Subayh, *op. cit.*, pp. 31, 48-49.

(68) Djemal Pasha, *op. cit.*, pp. 62-63.

(6) 同時この占拠は軍の「スルトウ」の側面をも有する。Kaval, op. cit. p. 179

(70) Daghir, *op. cit.*, p. 50; Birru, *op. cit.*, p. 468.

(71) ଦୀଯା • ହରିହାର - Diya Afandi ଶାହରାମ । Thaumaturge

(72) ジエマルは事態の推移に危機感を覚えて穩便な解決を

(7) ふつうの問題の抱和した危機感を対して積極的解決を忠告したが、いやした態度に改めて問題の政治性が見て取れる。Diemal Pasha, *ibid.* p. 64.

(73) 裁判をめぐるアラブ、イギリスの反応に関しては、

P. and Harold Temperley (eds.), *British Documents on the Origins of the War 1898-1914: The Last Year of Peace*, London, H. M. Stationery Office, 1938, Vol.10, p.826;

Burdett, *op. cit.*, vol. 1, pp. 233-240.

(74) エジプト亡命中のミスリーもまた死刑を宣告された。

Bidwell, Robin (introd.), *The Arab Bulletin: Bulletin of the Arab Press in Syria 1919-1920*. Cambridge: Cambridge Univ.

hive Editions, 1986, Vol.1, pp. 128, 144-145; *ibid*, Vol.2,

p. 36.

(7) *ar-junii, Kunain, Steinbau un-überw. u. -Rümbe-*
Kubrā. Djemashq. Matba'a al-'Uribā. 1960. pp. 97-99.

(76) ジャザーイリーは、当陸軍少佐としてアンタキア第

部長であつた。一三六連隊長の職にあり、かつ《盟約協会》アレツボ支

- (82) MAE. Turquie, N. S. 120. 潘釋註の參照。
- (83) 「ハニムのベハマム・ハバムカト」 ふづまれ、ハニ
ア州図書館担当監察官 (mufattish dūr al-kutub al-'amma)
としてチーリー・ヤ図書館なんの設立に關す」、アラビ
ア語原本を収集した啓蒙家ターンルは、のちに甥が刑死
するほどの基本的にはオスマント帝国の支持者であった。
ターンルは「闇」にて死んでしまった。 al-Bāni, Muhammad
Sa'īd, *Tanwīr al-Basā'ir bi-Sirat al-Shaykh Tāhir*, Dimashq,
Matba'a al-Hukūma al-'Arabiya al-Sūriya, 1920; al-Khatib,
'Adnān, *al-Shaykh Tāhir al-Jazā'iri*; Rā'id al-Nahīa al-
Ismīya fi Bilād al-Shām wa A'lām min Khirājī Madrasati-
hi, al-Qāhira, Ma'had al-Buhūth wa al-Dirāsāt al-'Arabiya,
1971; Escovitz, Joseph H., "He was the Muhammad
Abduh of Syria: A Study of Tāhir al-Jazā'iri and His In-
fluence", *International Journal of Middle East Studies*,
Vol.18, No.3 (1986), pp. 293-310. 彼のチーリーは「
レサ次々ルム。 Commins, David Dean, *Islamic Reform:
Politics and Social Change in Late Ottoman Syria*, Oxford
and New York, Oxford University Press, 1990, pp.
89-98.
- (84) 欲望の本と國語の學の教科書の出版者である
ハニムの書類教科書だ。ハニムのH学校
(madrasa al-handasa al-barriya) によると、この教養
の「書類」は1907年に著筆され、死後出版された體文
(*Kitāb Mizān al-Haqq fi al-Maniq*) によると、1907年
al-Jundi, *op. cit.*, p. 133.
- (85) MAE. Turquie, N. S. 186. 前掲註の參照。 ハニム
ならぬ叔父のターンルもハジアトに滞在したことは
示唆的である。
- (86) しかる「ハニムの名様の由でもある統治のアラビア一帯
からの擁立を画策しておら意図の一一致を見てこたわけでは
ない。 *İdāhāt*, p. 56; Djemal Pasha, *op. cit.*, p. 232.
- (87) MAE. Turquie, N. S. 120. Bompard au Ministère des
Affaires Etrangères, n°328 (Péra, 19. 4. 1913) et Couget
à Bompard (Beyrouth, 31. 5. 1913); AN423AP8. 前掲註
の參照。
- (88) *Ibid.* ハニムの本と國語の教科書の出版者である
チーリーのハニムの「抗運動の指導者アラブ・ハ
ル=カーフィル」が「國民」が強調されるところ。 MAE.
Turquie, N.S.186. 潘釋註の參照。
- (89) Khalidi, *op. cit.*, pp. 343-344; *idem*, "Social Factors in
the Rise of the Arab Movement in Syria", in S.A. Ar-
jomand (ed.), *From Nationalism to Revolutionary Islam*, Lon-
don, Macmillan, 1984, pp. 56-57.
- (90) MAE. Turquie, N. S. 120. 潘釋註の參照。
- (91) ハニムのチーリーの友人宛書簡 (1914年1月1日)
の「書類」。 *Thawrat al-'Arab*, pp. 127-128.
- (92) al-Shihābi, Muṣṭafā, *Muḥādarāt fi al-Isti'mār*, al-Qāhira,
Ma'had al-Dirāsāt al-'Arabiya al-'Aliya, 1957, Vol. 2, p.
35; Rashid Rida, "Rihlat Sāhib al-Manār (fi al-Sūriya)",
al-Manār, Vol. 11, No. 11 (1909), p. 947.
- (93) Birru, *op. cit.*, p. 269.

- (94) PRO. FO. 371/2490/128225. General I. Hamilton to War Office (25. 8. 1915).

(95) al-Qaysī, *op. cit.*, Vol. 1, pp. 33-36.

(96) ルバーマハムドによると、彼の軍団は 10 個（ただしこの他六個軍団にも若干のアラブ人がいた）からなり、各軍団は 1 万人規模の将校がいた。そのうちイラク出身者は、第115・117・118 軍団の命団（第116 軍団はクルダ人との混成）を占め、ハーフィーの第111 軍団はイラク出身者の中から上を彼が掌握していたとするべし。

（97） Lt.-Col. Parker, "Note on Arab Movement" (21. 11. 1915).

（98） al-Qaysī, *op. cit.*, Vol. 1, pp. 38-40.

（99） Ibid., vol. 1, pp. 43-44; Qadri, *op. cit.*, pp. 39-40. ジュヌエバ結社の仲介を務めたのがウマヤー一族だ。

（100） 「議定書」の下クヌスベヒュサビ Antonius, *op. cit.*, pp. 157-158. 極端 147 頁。

（101） Thaurat al-'Arab, p. 193; al-Qaysī, *op. cit.*, Vol. 1, p. 44.

（102） Sa'īd, Amin, Asṭar al-Thaurat al-'Arabiya al-Kubrā wa Ma'sāt al-Shariṭ Husayn, Bayrūt, Dār al-Kātib al-'Arabi, [1935], pp. 258-259.

（103） al-Shihabi, Muḥadarat 'an al-Qaumiyya..., pp. 112-113. ハフヤーナー・ハフヤーナー・ハフヤーナー・ハフヤーナー・ハフヤーナー

（104） Simon, Reeva S., *Iraq between the Two World Wars: The*

(105) al-Qaysī, *op. cit.*, Vol. 1, pp. 49-54. ルバーマハムドの戦闘部隊を占めた彼は、シベーリア准將ヘルムート・ツィーベーの特別の推举で准將に任命された。

(106) Qadri, *op. cit.*, p. 46.

(107) Khadduri, *Arab Contemporaries...*, p. 21. 極端のものとして参照。林武「アラブ民族主義研究ハーメース・ナーディーの論文」『政治社会』アラブ経済研究会、一九七四年、110-111 頁。

(108) as-Sa'īd, Nuri, *Arab Independence and Unity*, Baghdad, The Government Press, 1943, p. 2.

(109) al-Sa'īd, *Mudhakkirat...*, p. 20.

(110) Batatu, *op. cit.*, p. 180.

(111) as-Sa'īd, *Arab Independence...*, p. 2.

(112) [al-Sa'īd, Nūrī], *Aḥādīth*, Baghdad, Matba'a al-Hukūma, 1947, pp. 90-92.

(113) Tauber, *The Arab Movements...*, p. 113.

(114) ジュヌエバ「利比亚の民族運動」上卷 2 号 Anderson, Lisa, "The Development of Nationalist Sentiment in Libya", in Khalidi, et al. (eds.), *op. cit.*, p. 234.

(115) Antonius, *op. cit.*, p. 212. 極端 111 頁。

(116) The British Library, Oriental and India Office Collections. L/P&S/11/88. Cox to the Secretary to the Government of India, in the Foreign and Political Department, no. 82-B (Basra, 3. 12. 1914).

- (117) al-Sa'íd, *Mudhakkirat...*, pp. 23-24.

(118) PRO.FO.882/15.[Arab Bureau] to Lawrence ([Cairo], 26. 3. 1916).

(119) “ベニス地方の批判的な見解”トレバ^①、ハーリー・ナハラニス^②の不徹底^{アラビア語}。

トマス・ハーリー・ナハラニスは、アラビア語の本音を特徴とする英仏両国との関係^{アラビア語}が、反帝国主義者であることをアラビア語の像を色褪せたものとしている。後者の批評は、アラビア語に集結する人々の心地^{アラビア語}。後者は、James P. Jankowski, *Egypt, Islam, and Arabs: The Search for Egyptian Nationhood, 1900-1930*, Oxford, Oxford University Press, 1986, p.31

(120) PRO.PRO.30/57/48. 'Aziz 'Ali [al-Misri], "Sa Seigneurie Earl Kitchener", (Cairo, 5. 2. 1916).

(121) 『元の忠誠<アラビア語>、英國<アラビア語>トクナハム<アラビア語>、ハーリー、ハーリー・ナハラニス<アラビア語>、彼の「忠誠」ハーリーが本音<アラビア語>の忠誠<アラビア語>れた』。

PRO. FO. 371/2140/46261. 振興社<アラビア語>。

(122) PRO. FO. 371/2140/87395. P. P. Graves, "Note on Conversation with Aziz Ali Bey el-Masri" (6. 12. 1914), enclosed with Cheetham to Grey, no. 203 (Cairo, 13. 12. 1914); Burdett, *op. cit.*, Vol. 1, pp. 284-286.

(123) PRO. FO. 371/2140/77088. Clayton to Cheetham (30. 10. 1914), enclosed with Cheetham to Grey, no. 177 (Cairo, 15. 11. 1914); Burdett, *op. cit.*, Vol.1, pp.

(124) MAE. Guerre. 869. Colonel Maucorps, "Sur un entretien avec le Commandant Aziz Bey", n°52 (Le Caire, 7. 6. 1915).

(125) Antonius, *op. cit.*, p. 155. 振興社 1 大判頭。

(126) Dāghir, *op. cit.*, p. 90.

(127) PRO. FO. 371/3415/186566. War Office to the Under Secretary of State, no. 756/13, MI2 (10. 11. 1918). 彼はヨルバ<アラビア語>の反逆闘争<アラビア語>を支持<アラビア語>。 PRO. FO. 371/4236/126722. Taylor to Crackanthorpe, no.M8110 (Madrid, 10. 5. 1919), enclosed with Crackanthorpe to Curzon, no. 338 (San Sebastian, 29. 8. 1919).

(128) L/P&S/10/464. Foreign Office to Cheetham, no. 87 (11. 8. 1914).

(129) PRO. FO. 371/3396/37213. Hardinge to Balfour, no. 92 (Madrid, 20. 2. 1918).

(130) ベニス<アラビア語>、トマス<アラビア語>、ロバート<アラビア語>、トマス<アラビア語>、カスター<アラビア語>、トマス<アラビア語>、トマス<アラビア語>、カスター<アラビア語>の名前<アラビア語>。

(131) ハルベル<アラビア語>、ガル<アラビア語>、ラム<アラビア語>、ムスリム<アラビア語>、アーヤル<アラビア語>、クル<アラビア語>（アラビア語）。

(132) サニサト<アラビア語>、ムニタ<アラビア語>、ラバーハ<アラビア語>、ペレスト<アラビア語>、メン<アラビア語>。

(133) ハルベル<アラビア語>、トマス<アラビア語>、在地支配者<アラビア語>。

ルの構想では、すでにオスマーン帝國の手を離れていた
ハヤマール、クウヘル、リヤドは除外されてしまふ。

(134) 総社メンバーのフューリーは、ハラートにて述べてゐる。

「ムカル軍におけるトルコ人将校の丸〇ヨルトクル人学校
の一部がわれわれの総社のメンバードある」 PRO. FO.
882/15. 指揮官33参照。

(135) PRO. FO. 371/3396/14436. Hardinge to Balfour, no.

25 (Madrid, 14. 1. 1918). “ベニーザ” ハチヤハセトハ
ヒト半島の諸勢力との軋轢を指摘し、彼の没落を内訌一
にこな。もちろん、ハサイン自身は、ヒジャーブを甘ん
じとした戦後の新秩序を構想していた。ハラートに隸しては
以トを參照。 Teitelbaum, Joshua, “Sharif Husayn ibn Ali
and the Hashimite Vision of the Post-Ottoman Order:
From Chieftaincy to Suzerainty”, *Middle Eastern Studies*,
Vol. 34, No. 1 (1998), pp. 103-122.

(136) Ghusayn, Fāiz, *Mudhakkirati 'an al-Thawra al-'Arabiya*,
Dimashq, Matba'a al-Taraqqi, 1956, pp. 238-239; Khad-
duri, “Azīz ‘Ali...”, pp. 152-156. ハリ・ハヤムダム・
アル=トマーハー（1882-1969年）は、ハラートの盐
“ベニーザ”従つた軍人のひとりである。彼もまた“ベ
ニーザ”に隸する「トハド」軍を離れたがその後復帰した。
‘Alī Jawdat, *Dhikrayāt ‘Alī Jawdat 1900-1958*, Bayrūt,
Matabi’ al-Wafā’, 1967, pp. 41-45.

(137) 地圖-大臣-軍事 (ハラート-軍事) Thawrat
al-'Arab, p. 108.

(138) PRO. FO. 371/1968/37584. Cheetham to Grey, no.

76 (Cairo, 9. 8. 1914).

(139) MAE. Guerre. 869. 指揮官12参照。

(140) Antonius, *op. cit.*, p. 238. 指揮官11参照。

(141) Khoury, *op. cit.*, pp. 78ff. 「ハラート-軍事」 11月23日
トの内訌を記す。 Russell, Malcolm B., *The First Modern
Arab State: Syria under Faysal, 1918-1920*, Minneapolis,

Biblioteca Islamica, 1985; Gelvin, James L., *Divided
Loyalties: Nationalism and Mass Politics in Syria at the
Close of Empire*, Berkeley and Los Angeles, University of
California Press, 1998.

(142) Ajami, Fouad, “The End of Pan-Arabism”, in T. E.
Farah (ed.), *Pan-Arabism and Arab Nationalism: The Con-
tinuing Debate*, Boulder, Westview Press, 1987, p. 106; al-
Azmeh, Aziz, “Nationalism and the Arabs”, in D. Hopwood
(ed.), *Arab Nation, Arab Nationalism*, Basingstoke and
London, Macmillan, 2000, p. 74.

(143) W. ケニー-ハラート-軍事の兵士は、オスマーン政府の
官僚からトマーハー・ナリズムのイデオロギーに轉じ
たサーキュラ・アル=フスリーの立場をベーハーのや
れと同定するが、ハラートには疑問が残る。ドムバ画者が一
見同じ行動をとつたかひむこと、ベーハーを単純な
「体制派」オスマーン主義者と見なすのがややなまめか
ねら。オスマーン=トマーハー主義の證拠は、ハラートの複雑な分
類化を避けておどおどおど。 Cleveland, William L., *The
Making of an Arab Nationalist: Ottomanism and Arabism in*

the Life and Thought of Sati' al-Husri, Princeton, Princeton University Press, 1971, p. 41.

(144) 「れを彼の自身の言葉で置き換えるないが、『ステイム』 = watan, dawla, umma, 「ネイション」 = qawn, jins となるだらへ。『ステイト』と「ネイション」の区別に関しては、以下の文献所収の K・A・アッピアの論考を参照。マーサ・C・ヌスバウム他、辰巳・能川訳『国を愛するところ』——愛國主義の限界をめぐる論争』人文書院、1990年。

(145) 板垣雄二『歴史の現在と地域学——現代中東への視角』岩波書店、一九九一年、一六一—八頁。

(146) 例えば、ウライシーガリビア戦争やバルカン戦争の際に『ムヒーディン』紙で展開した愛国的な論説は、彼がアラブ會議で問うたアラブ性と主觀的に何ら矛盾していない。Khalidi, "Abd al-Ghani...", pp.57-58.

(147) 以上の理論的立場に関するは、スラヴォイ・ジジェク、鈴木一策訳『為すところを知らざればなり』みすず書房、一九九六年、特に第五章。

(148) ハハした「国民国家」を含む「アラブ諸国家システム」については、長沢栄治「アラブ主義の現在」木村・長沢編『地域の世界史一一 地域への展望』山川出版社、一〇〇〇年を参照。ただし、上記論文で言及される「アラブ主義」は、本稿におけるそれに較べ、より広い文脈にもとづくものである。

[付記]本文脱稿後、酒井啓子編『民族主義とイスラーム——宗教とナショナリズムの相克と調和』(アジア経済研究所、

1991年)を手にした機会を得た。特に同書の第二章「中東・アラブ世界における民族主義と宗教」は、初期アラブ・ナショナリズムの的確な研究史整理としても参考されるべき論考だろう。それを踏まえた上で、本稿の位置取りを改めて示すとすれば、初期アラブ・ナショナリズムにおける「国民主義」的要素を生み出した歴史的条件のみを考慮するのではなく、もう一つの、ありえたかもしれないオルナタティヴな側面を探る試みであるといふことになろうか。